

る・く・る

保存用
永久保存

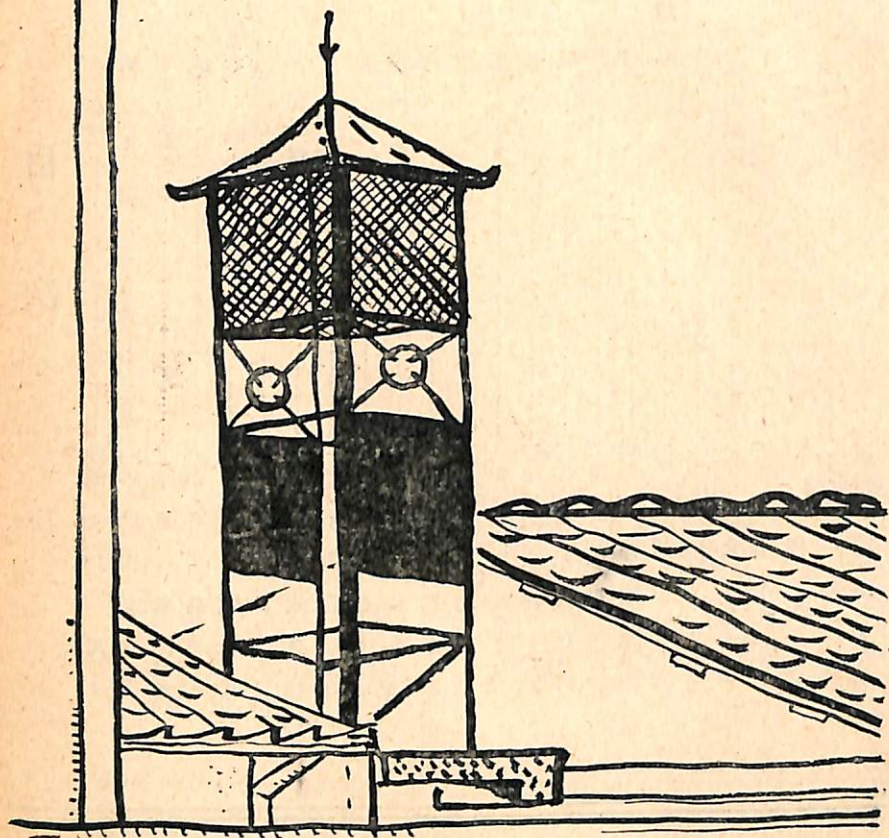
都立松原高校図書館蔵書

	No. S 63
東京都立松原高等学校図書館	

東京都立松原高等学校

10

る・く・る



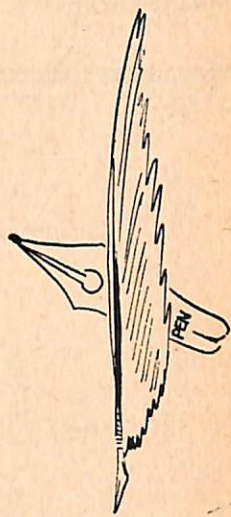
東京都立松原高等学校生徒会

目次

詩	る・くーるに寄せて	校長	中村一勇	4
	朝の日光	一年	岩出和幸	5
	61の手帳から	二年	原孝一郎	6
	灰	一年	藤良子	8
	わたし	二年	川崎恵子	10
	凍えたくちづけ	三年	高井和江	11
	青春狂想曲	三年	藤田武久	12
	グロリー	一年	川内自子	18
	雑感	一年	中西春夫	19
	雪の希望	一年	小林和幸	21
	自然	一年	青木溺子	21
	運命	三年	山本浩司	22
	街	一年	中野紀久子	25
	ねがい	三年	船水洋子	27
	朝	二年	秋元久代	27
	静	二年	渡辺雅子	29
	山歩きの緩徐調	三年	松野祐三	29
	清流	三年	高井一枝	32
	歩	二年	新村弘	38
	下田山風流記	三年	山本美南子	40
	牙盾	一年	森田美佐子	44
	音楽と私	一年	高橋紀久子	45
	晩秋の想い	一年	角田喜一	46
	変化ある生活	二年	大墳靖子	49

随想

創作	駅弁食べ歩記	一年	久津間正彦	49
	ダイヤに乗って	二年	後藤展志	51
	痴論	一年	鈴木国彦	56
	時	一年	三宮孝志	58
	白菊の花	二年	大墳靖子	60
	アレツオへの道	三年	長野国子	61
	どんぐりの歌	二年	阿曾村孝雄	68
	遠い夢	三年	松野祐三	74
	朋輩	二年	河野正人	85
	卒業生諸君に一言	二年	飯塚正	97
送辞	教頭	二年	小山恒雄	97
	教諭	二年	関山恒	97
	随感	二年	関山恒	97
	人生の「さい」を投げる	二年	外川秀二	98
	随感	二年	大石清司	99
	ときの話	二年	富増寿男	100



る・くーるに寄せて

学校長 中村 一 勇

学校新聞が学校内部の細部にわたって随分報道しているのに対して、る・くーるは年一回の発刊によって、学校生徒員の落ちつきのある精神生活の面を浮き堀にして自由に発表しているといえるであろう。従ってる・くーるは、全校の一人一人のものであるから、少くとも本校に籍ある人は、在学三年間の中に、一度は投稿する義務があることになる。心のむすほれを歌や詩や小説に、時代の動きを論説に評論に、現実でも未来の夢でも、文を一文にすることはそれ程むづかしいことでなく、寧ろ愉快極まるものと思うのである。多くの作者の魂にふれるために、出来る限り読んで心を豊かにすることも必要であるが、自分の心の動きを文とすることも、人生の意義をつかむ点からは非共必要なことである。しかも何を書くにしても自分の真実の心情を正直に書いたらいので、決してむづかしいことではない。徒らに美辞麗句を考えて並らべる必要はないのである。要はその人が、何を考え如何なる思想をもち人生観

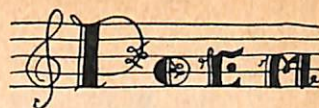
に立って日常の生活を、真実に生活しているかが、作品の価値を左右することになる。結局、其の人の知識経験思想等の総合された人格全体が個性として、文章の中にみなぎって名作ともなるのである。其の個人の人格内容の如何ということが基本となるので、表現の仕方は技術的な問題といえるであろう。

全生徒九〇〇名の人間性は同一ではないから、九〇〇通りの文が出来ることになる。而もその作品の内容は人品性の高い個性豊かなものほど、優れた価値があることになる。

現在活躍している、大鵬や力道山、更に三橋美智也や山下清のように、自己の個性を思う存分に発現したような、松高生の作品は必ずや生れるであろうし、亦生まれなければならない。

創刊当時有志による文芸誌として誕生した、る・くーるが、年を経るにつれて、其の内容を次第に拡げ豊かにして、人間生活のあらゆる面にメスを振るって開放し、名実共に松高の機関誌にまで成長発展したことは誠に芽出度い限りである。一人の生徒が学校を卒業して、あらゆる障害をのり越え理想を追求する精進努力を重ねて、社会的に優位なポストに就いて、活躍する姿に例えることが出来るであろう。

しかる・くーるは、このままで満足してはならない。全生徒の一人一人の責任あるものとして内容をよりよく充実するためには、限界はないのである。全生徒が認識を新たに一段と、青年としての哲学を思索し、人間としての正しい真理の道を勇敢に実践して人格的に成長することが、唯一の道である。現実には捕らわれて、安易な道に走り易い世風に迎合してはなるまい。かくしてる・くーるが号を重ねる毎に、飛躍的に発展することを祈ってやまないものである。



朝の日光

二年 岩出 和 幸

おお！
僕は見た、見た
すばらしく
大きな日を
からりと晴れた日を
すべての物、すべての者が
すばらしい力に満ちた
新しい、力強い
一日の誕生を

'61の手帖から

二年 原 孝 一 郎

朝だ！

雨戸をがらりと開ける

そこに日光がどっとおし寄せる

あ！ まぶしい

僕の目がくらむ

頭を一発なぐられたように

僕はそこに立ちすくんだ

その激しい日光はまっていた

僕の朝のめざめを

やがておすおすと痛む目を開く

細く細く

だんだん大きく開けた

(一) 朴の花

風ゆるやかに揺らぎ

朴の花は開きぬ。

きじ鳩の声のみありて

朴の花

揺がざりけり。

(一) 日盛り

ビルの谷間

ゆらゆら

炎天に燃ゆ。

舗道の柳うなだれ

足ものろく

短き蔭ったひ来るバナマ帽。

× × ×

アスファルトの熱気

たち込め、

ぎらぎら

車の流れは遅し。

とだえては、

つづき

またとだえては

シャツ、

パラソルよぎる

ビルの谷間。

(一) かなかな

涼しさの中に醒めたり。

枕近くかな／＼鳴くや

遠くこたえて

鳴ける声あり。

白みゆく窓辺の床、

眼をとじて

想ふことなし。

起き出でて

窓を開けば

部屋広く朝の気通う。

かな／＼鳴けり。

こたゆるあり。

静けき庭に

おりたちて

樹々を仰ぎて

ひとり立つなり

(一) 子供らの夢

斜め後に

両手を出して

飛行機だ

飛行機よと

駆けていく子ら

駆ける落葉

追いかける落葉に混じって

赤い靴

泥靴もかける、

録杏の黄色も一緒に駆ける。

灰

一年 斉藤良子

—
なんと、つまらないものか
誰も、気にも止めない
人が、物が、

いや万物が、一度は通る過程なのだ。

人にふまれ、風に吹かれ、

自分の意志のないまゝにして、

いや、それもよいかも知れぬ、

おまえには、今迄余りにも自由がなかったのだ、

社会にも、

家庭にも

あらゆるものに、

自分の考えだけがは

動く事が出来なかつたのだ。

我々は常に自由を求める、

しかしそれにも、限度はある。

それをこせば、罰せられるのだ、

我々はふと何にも束縛されない
自由がほしい時がある。

しかしいくら民主主義の世の中とはいえ、

現実には、有りえない事なのだ、

故に我々は夢を追う、

夢には、それがあるからだ、

青春期の年代は（現実からかけはなれた。理想的な夢を描く、

しかしそれが余りにも早く

破れる時が来るのだ、

自殺！

破滅！

この年代に、一番多い事である、

これを持ち越えてこそ、

人間的に一段と向上するのだ、

余りにも、純真な人は、

その厚い壁に出合い、

自分を、自らの手で殺す。

そしてお前の様に

考える事もなく、

今日は風に飛ばされ

明日は人にふまれ、

土となるまでの、意志のない、

自由な生活をおくる、

それで幸福か、

我々は、幸福とは思わない、

人々には惜しまれ、

純真な心を持ったまま、

世の中の矛盾も知らずに、

土となる。

その後には、

清らかな花が開らくであろう、

しかし長年をへだてて見れば

多くの困難も楽しい思い出に変わる

汚れも知らずに、自ら

最良の手段として命をたつたのだ

しかし我々は、

人生というものがある。

それを立派に生きぬいてこそ

お前と同じ様になるのだ、

我々の未来には、

おまえの時代がある

その時になって、

初めて我々は、

自由に、

家族にも、

社会にも、
すべてに束縛されずに生活することができるのだ。

二

「死の灰！」

お前と同じ仲間である。

けれど、なんとぶきみな響きを、持つ名であろう、

人間自らが発明し、

それによって自らが破滅する、

お前達には、

それをどうにか出来ないのか、

あっ！ お前に言ってもだめだ、

お前には心というものが無い、

この解決をつけるには、

人間自らの手でやらねば、

我々には、遅かれ、早かれ、

お前の時代がやって来る

それまでの人生を

有意義に過し、

後世に、よりよい社会を！ 家庭を！

残して行くよう 努力せねば、

そして その時に、

お前と同じ様になっても、

心が失われても

我々は満足であろう

わたし

二年 川崎 恵子

(一) わたし

わたしは宇宙一のすばらしい乙女です、いつもロマンチックな波の静かなコーラスをききながら、とかりこむ小さな子供たちとお話します、だれかがわたしを慕う時、やさしく白くすき透るベールをかけてあげます、わたしがベールをかける時ニコリ笑って目をつむるの、それがとても楽しみです。

あの地球の片隅で赤い洋服を着てもみじのような二つのお手々を広げてわたしを呼んでいます、

「どうしたの、お嬢ちゃん」

「あたしのママに会いたい」

「おやすみなさい、可愛いともみじさん、おめめをつむっておねえねしたら、きれいなあなたのママに会えますよ」

おやおや、お隣のいじめっくん、おふとんはどこかしら、わたしのベールじゃ風邪をひいてしまいますよ、ちゃんとおふとんに、おやすみなさい、

大男がこないうちに。

(二) 二わたしの友

わたしの友を見て、みんなが云う、

「あの人、暗いわね」

「あの人、孤独なのね」

「まるで、蛇のような人」

確かにそうだ

でも、私は知っている、

あの、サファイアのように光る瞳に、

未知の世界を描き、

あの、きれいな脳理に誰もが驚くような何をか、つかみ、

あの、キリッとひきしまった口元から、宣言する事を。

わたしの友を見て、みんなが云う、

「あの人、暗いわね」

「あの人、孤独なのね」

「まるで、蛇のような人」

でも、みんなよくごらんなさい、医者のような足取りで、

科学者のような、落ち付いた目つきで、

じっと未来を夢みているではありませんか。

わたし達の華やかな、そしてくだらないお喋りに、

目もかさず、

そのタンポポさんも、かたばみさんもしっかり目を閉じて、夢の御国へ御散歩ね、
どうぞごゆっくり行つてらっしゃい、私がみてあげますからね、でもあと五時間なくってよ。

あらあら、もう一時間もするといやな赤い大男がやってくるわ
そろそろベールをひきづつて、お家へ帰らなくては、
何億年も昔から追ってくるの、

わたしも何千、何万回とやせ細りました、でも、わたくしにも
大男にまけない足を持っています、

あの男が来ると地球上は狭くなり、自動車事故がおこり、
ラジオがなりだし、テレビがうつり、近眼がふえ、山では木が
切られ、海や川では銀色のうろこが光り殺される、
わたしをかこんでいた可愛い子供達を助ける力はないの、
ただ一人ベールをひきづつて逃げるだけ、

でも又、男が西の方になくなった時、そと出てきて、一晚
しかない命の子供に波のコーラスを聞きながら、お話しをして
あげるの、

地球のお友達とお話しをするの、そして夢の国に行つていらつ
しゃる方達の、るす番をするの、

それが今までの、これからの私だけのおつとめ、

さあ、地球のお友達、つれだって夢の国へいつていらつしゃい
おるすはひきうけてよ、

さあ、今からあなた達に、お話ししましょう、

耳もかさず、

全身を、

夜の湖のように静かに、

自分だけの世界を考えている人、

外見、蛇のように暗い人、

でも、その心の中には、

自分の何かに対する情熱を、

立派に一つの形に造り上げるまで、

激しく紅く、燃やし続けている人、

わたしの友を見て、みんなが云う、

「あの人、暗いわね」

「あの人、孤独なのね」

「まるで、蛇のような人」

それでもわたしは、

こんな友をもって、幸せだと思う。

凍えたくちづけ

三年 高井 一枝

そとと、写真にくちづけでも

死人のような冷たさだけが

私の血に流れこむ

幻を頭に描いても

暗黒の中に包まれる
心に狂ほしいほど燃えてはいるが頭の中は氷ってしまった

○ 冷たい空気が

涙に乾いた顔を撫で
体は凍えてしまっていた
わずかな手の暖かみだけが
私に思い出を蘇がえらせる
どうにもならぬ
不自由な体が
唯一の幻を、追っている

○

光の外は、暗く、冷たく
冷えきった空気が流れこみ
そして、だんだん
激しく、強く流れこむ

○

今は何も、何も見えない
何も見えない
足がだんだん氷ってきた
血も、涙も、心もすべてが
この思い出の中に
永久に
氷ってしまった方がいいのに……

青春狂想曲

三年 藤田武久

新しき春

— その一 —

俺は十七になった

全身の血が

強烈な精神の塊となって
とめどもなく
奔流する

なぜか

俺は苦しい

ひたひたと押し寄せる

不安？

憂鬱？

それとも……

焦躁？

それは心の通った針金のように
俺の胸をしめつける

— その二 —

俺は俗世を脱した

俺は一人山へ来たのだ

汚濁のない

干渉のない

苦悩のない

この山へ

誰もいない

俺は孤独という実感を

しっかりと掴んだ

今辿ってきた道が

もつれ合うように

果てしなく続いている

灰色の下界まで

—— いまわしい

—— 嫌悪すべき

俺は頂上に立って

絶叫した

○

それから数ヶ月……

真夏の昼下り

黄色くなっていく

……

世の中のあらゆるものが

悪も

憎しみも

俺の顔は汗と脂でたえざる

俺の神経は高ぶる

俺の心は黒く焦げる

ついに

幻想の境地に達した。

彷徨した

流浪した

肉体を捨て

純粹な心を持って

俺は夢を求めた

○

嵐は過ぎ去った

後には……

○

秋風の吹く頃

俺に変化が起った

俺の炎が

十七才の情熱が

恐ろしいほど鮮明に

あの女を浮かび上らせた

俺の忘れかけていたもの

俺の心の片隅に

長い間隠れていたもの

炎は照らしだしたのだ

そして……

あの女は

微風のように

清純な香りを

この俺に運んできてくれた

妖精のように

美しい星を

この俺の心にともしてくれた

俺は

その香りを胸一杯に吸い込んで

その星の光りをじっと見つめて

初めて……

世の中の全てのものが

新しく生々と

輝やいているのがわかった

俺は

秋の野に立って

人生の広大さを

生きている喜びを

ありありと感じた

でも……

或る日

俺の言葉が……

俺の動作が……

あの香りを……

あの星を……

雪の降る夜

出会には別離が……

それは悲しい

だけど

だけど……

俺は恐れない

激しく燃えた命は

永遠に消えないだろう

あの女を失っても

あの香りは秘められている

あの星は輝やいている

外は雪が降っている

俺は静かにページをめくった。

ヤ
ツ

一年 下島美智子

馬鹿野郎ッ

キサマは何で馬鹿なんだ

いくら山が好きだったからって、

好きだったからって……

死ぬなんて馬鹿だ

大馬鹿だ、畜生ッ

俺はお通夜の晩

キサマのおふくろさんに会ったぜ

いいおふくろさんじゃないか。

なのにキサマは、

なのにキサマは、畜生ッ

あんなおふくろさんを残して先に死ぬなんて、

世界一の親不孝者だ

俺はキサマと最後の別れをすましてから

俺の前で泣く、そうさ

虚栄も捨て、恥も捨て

さめざめと泣く孤独な一人の人間を見て、

人前で涙を見せた事のない俺も強気な俺も、泣いたぜ……

親子というものの愛情の深さを

縁の深さをしみじみと知らされたよう

で熱いヤツがこみ上げて来て

こまっちゃった。

俺のおふくろが死んじまってから今日まで、

久しい間、おふくろという暖いものに、

触れたことのない俺だが

改めてそれを知らされたよう

で悲しかったんだ、

さびしかったんだ。

心の底から泣かされたんだ

なのに、

なのにこの気持を知らせてやりたい、

いつものキサマは居ない、

こんな俺の気持の成行を聞き、

肩をひっぱたき、答ってひやかすいつものキサマは居ないのだ

本当に馬鹿なヤツ

俺がいつもキサマを指さすことばは「ヤツ」だった。
ヤツだけがキサマで

キサマだけがヤツだったんだ。

キサマは俺にやいやつだった。

「テンデ、イカシテルナ。」

これがキサマのクセだった。

そうさ、キサマも、

テンデイカシテル、良いやつだったんだ。

俺が始めて

始めて人を好きになった時……

そうさ、初恋ってやつをした時にな。

口も聞けないような弱気な俺に、キサマはこう言ったわけ

「役女に向って言うのさ、

『オレはオマエが好きだ』ってな。

もし受け入れてくれなかったら、その時はハリ倒してヒッカツ

イデくる位の度胸と勇気と積極性がなきゃだめだぞ。」

ってな。

そう言っ、

俺の肩をたいて笑ってたっけな、

人の気も知らないで、なんて俺もキサマを恨んだぜ。

だがなあ、

時には他人の様に薄情な事を言っ、

気の弱かった俺の心を泣かせたのも、

キサマだった。

誰よりも心配してくれて暖ったかったのも

キサマだったんだ、

俺にやもったいない位、

良いやつだった。

キサマを知ってから俺は変わった。

強くなった俺、

キサマに冷たくされれば、されるほど、

俺は強くなったんだ。

キサマに言えば笑うだろうがな、キサマは山へ行く前に俺に最

後の冗談をいった。

「俺なんか死んだって、誰も泣く女なんかいないから、気が楽

さ。」

なんて言いやがった、畜生ッ

キサマは、おふくろさんという、

一番良い女を泣かせたんだぜ。

この年になるまで、

キサマ一人に命を掛けて生き抜いてきた、

一人の女を泣かせたんだ。

キサマのおふくろさんは、

「せめて……、せめてあの子の父が生きていてくれたら。」

って泣いていたっけ、

親不孝者さ、

キサマは世界一の親不孝者さ、

馬鹿野郎！

白い歯を見せて笑っている薄っぺらな、

写真の中のキサマに俺がこう言ったら、

キサマのおふくろさんはな、

「もう何も言わないでやって下さい、お願いします。」

ってな、畳に手をついて言ったぜ。

それから俺は、アイサツもしないで、

イキナリ外へ出て来てしまった。

新しい涙が出て来そう、

おふくろさんの前に居られなかったのさ。

思い出すんだ、

勉強の嫌いだっ、キサマ、

そのくせ出来が良かったキサマ

スポーツなら「何でも来い。」のキサマ。

女性に人気のあったキサマの事をな、

俺はそんなキサマより

いつも一段下さ

だが、俺はそれで幸せだった

キサマに負けても

ちっともくやしくなかったんだ。

あまのじゃくだったキサマ

俺が海だと言うと

キサマは山だと言った

それからキサマは山男になったんだ

そして俺も海が

三度の飯より好きになった。

キサマは野菊のようだった。

俺がこんな事を言ったら、

ひやかすかい？

いや、ひやかしてくれ、

もう一度だけ、

そのキサマの広い肩で

大きな口で、笑ってくれ

もう一度だけ、

笑ってくれ、

いや、もうよそう

涙がこみ上げてくると困るからな

だが、俺は言うんだ。

キサマは野菊のようだった、とな

踏みにじられても、

いじめられても

どこかで根強く生きている花

そんな生き方がキサマだったのさ

だからキサマは

俺の前に咲いた野菊だったんだ、

海が好きだったくせに

山が好きになったキサマ
あのキサマの山に、

キサマは永遠に生きている
だが心のシミッコで

海もいいな、と思っていたキサマ

その心のシミッコだけは山でなく
俺の海のどこかに

生きていてほしい。

いつまでもいつまでもな。

野菊のように根強かった。

キサマの生涯

太く、美しく、だが短かった。

キサマの生涯

その終りを俺に無理やり解らせようとする

海辺のお墓の

真新しい白木の墓標

その下でキサマは静かに眠っている、

野菊にかこまれながらな。

グロープ

一年 川内 自子

僕は今日こそ買うつもりだったよ
でも、やっぱりだめだったよ

何故僕がそれを買わなかったあ

何故僕が……

でもね、でもね、僕はいいんだ

それはね

僕のお小使いが、

みんななくなってしまうまでね、

買う気にはなれなかったんだよ

それでもね、

僕は明日からも、おもちゃの前で

どんな僕の手に渡るのか

ひやひやだよ、きつと

雑感

一年 中西 春美

一 焦燥

炎の幻覚

燃える、燃える

ペロペロすべてなめつくし

すべてを醜く変えていく。

血潮よりも紅く、

無気味なへび舌のように

踊る、踊る

へび舌が踊る。

サア燃えろ！サア踊れ！

オレの胸が熱くなった。

お前はオレをも焼きつくすのか

へび舌がオレの心臓をかむ。

無気味なへび舌が、

オレの心臓で狂舞する。

二 虚脱

十二月、午後一時。

十二月

午後一時。

陽ざしが暖ったか

床にうつる影、

ほんやりとだるい。

ガラス窓の向う、

鉛色の葉をつけた木々が

何もいわない。

陽ざしでくずれた醜い土塊、

コンクリにこびりつく。

オレはベンをもつ。

何もいわない

腕も動いてはいない。

オレの頭は……

そう、何もなし。

“虚脱”

しかし心地よい虚脱。

オレだけの時間は止った。

何も動かない。

オレのほかに、

冬の暖かさを感じるだけだ。

十二月、

午後一時……

三 夢想

一人の落伍者の夢

誰もいない野原に

可愛らしいむらさきの野花と向い会い、

お前とだけ話したい。

太陽は私をみてくれる。

人の世から脱け出たいともがく

私に

お前達だけがやさしく包んでくれる。

不満も、疑惑も、悲しみも、お前達の前では、

ひざまづく、ささいな人間界のちりにすぎぬ。

緑と青のひろがりの中で

無限大の力がにじみわく。

喜びも、楽しみもない。

そしてみても苦しみも悲しみもない。

あるのは清らかなたましいのお前達と、

私をやさしく愛撫してくれるお前だけ、

そこには希望もない、失望もない

人間界を支配する貪欲な本能さえない。

お前達の世界は「しやわせ」しかもたない。

愛らしいお前も、清純なお前も、

力強い太陽も、

「しやわせ」だけしか知ってはいない。

私は「しやわせ」を求めて尋ねあぐねた。

真黒に汚れた私なのに、お前達の門はひかえめな、

一すじの光をなげかけ、私を導いてくれた。

一瞬、私はお前達におぼれてしまった。

人間界の私が、お前達の世界に入ることとは、

とうてい不可能なことだったのだ。

「ごめんよ」

私の心をいやしてくれたお前達だったけれど、

私は一個の人間にすぎぬ。

お前達はきれいすぎる。

時々、私を見苦しくしてしまうのだ。

変化のないお前達に、

ぜいたくにも耐えられなくなってしまったのだ。

お前達の「しやわせ」も私にも苦痛になった。

「ごめんよ」

私は又、人間界にもどる。

私は再出発するのだ。

やはり人間界の荒波の力が、私にはあっているのだ。

「さよなら」

お前達はしやわせだなあ……。

しかし私もしやわせ者だ。

人間らしい夢と、希望を思い出したからなあ。

「さよなら、ありがとう」

私の行く手は人々のあざけりの中だ。

だがな、ありがたいことに、

私にはもう、そんなもの見えやしないのさ。

いつまでもやさしいほうようを忘れぬお前と、

裏切りを知らないお前達だけしか

みえなくなってしまうのさ。

雪の希望

一年 小林和幸

降った！降った！

何日振りかで、天から降った。

雪だ！そうだ雪なんだ。

今年になって初めての、

本格的な雪なんだ。

雨じゃないんだ、雪なんだ。

どっちにしろ、水気があるんだ。

夕辺の雲は、僕の心の様に、

低く垂れ込めている。暗い。

暗い！暗い！

だが薄く輝いている。

この淡い輝きは、

朝になれば、

そうだ！朝になれば、

この鈍い輝きも、

きつときつと、一面の鋭い、

強い、銀の輝きになるだろう、

そうだ！雪の朝

その明かるい朝を夢見よう

自然

一年 青木 滯子

冷たい冬に耐えて春を待ち

草木は若葉を萌やす

そして夏に茂げり

秋に色付く

こがらしの吹く頃

枯れて冷たい土に



運命

三年 山本浩司

やがて再び冷たい土に
自然は繰り返し
人世も亦、繰り返えす
その人間は変っても
その繰り返えしは変わらない
無駄なその繰り返えし
何の為に生まれ
そして生き
何の為に死ぬのか
無駄なその繰り返えし
青春の喜びも
その恋に対する喜びも
その悲しみも
全ての無駄な繰り返えしに
消えてしまうのだ
文明が発達し
人間がどんなに利巧になっても
寿命が延びたとさわいでも
この繰り返えしの中の
ほんの一場面にすぎない
だが人間の小さな力では
どうにも出来ない
自然はそれほど大きいのだ。

もう

人生なんて型にはまってるんだ
大きな型の中で人間共が
動けるだけ精一杯に動く
それが人生なのさ
まったく つまらんものなのさ
人間なんて つまらんものなのさ
何故かって？
誰もが皆人間だからさ
誰もが皆同じだからさ
だから俺は鬼になりたい
地獄の大王になりたいんだ
そして全ての人間共を
全ての人間共を制してやる
福沢諭吉が言った語
「天は人の上に人を造らず
人の下に人を造らず」と
しかし上がこの世にある限り
下は必ずどこかにある
全てが同じと言う事はない
そんな人間なんて
つまらんものさ！

○
解かるかい俺の考えている事が？

(一)
人生なんて つまらんものさ
何故かって？
ウフフフ……

人間なんて つまらんものさ
何故かって？

エヘヘ……
解かるかい俺の考えている事が？
え？ 分らない
馬鹿野郎

○
人生なんて つまらんものさ
何故かって？

誰もが「人生とは？」なんて
考えるからさ
遠い昔のあのギリシャの時代から
いやその前の
オリエントの時代から
人生なんて
もう考えつくされているからさ

え？ 分らない

馬鹿野郎！

おまえたち人間はな
パスカルが言った様に
「考えるあし」なのだ

俺は自然よりも強い
神になるのだ

地獄の神

地獄の大王に！
解かるかい？

人間みたいにこせこせしないんだ
行う事を でかくするのさ
戦争がしたかったら
思いつきでつかいのをやるんだ
人を殺したければ

人を殺したければ
完全に殺しまえ

それで壮快になるんなら
それでいいじゃないか

後になっても悔まないんなら
それでいいじゃないか
人間なんて そんな所がない
だからつまらんものなのさ

(二)

君！ 何をしているの？
僕？ ウフフフ……

君！ 何をしているの？
え？ エヘヘ……

君！ 何をしているの？
む！ 考えているのさ
君！ 何を考えているの？

僕かい？ 僕はね
遠い未来の事をさ

僕が地獄に行った時の事をさ
火の車に乗せられて

血の海を渡るんだ
針の山にハイキングに行くんだ

そして僕は人間の肉を食うんだ
君！ 地獄に行くの？

え？ そうだよ
僕はあそこにあこがれてるんだ
地獄！ いい所だぜ！

サンズの川で泳いだり
血のプールで遊んだり

人間の魂で野球をするんだ
バットは人間の土性骨さ

街

一年 中野 紀久子

道で

あの向こうに
日が落ちた。

影が冷たく変わった。
後から、月が生まれた。

道も冷たく変った。

テカテカと

油を乗せて光り出していた。

道のそばの

草は、

カサカサと

寒さを忍んで動き出していた。

真上に、月が見える。

その月の下に、ずんぐりと

影が浮かんでいた。

月が消えた。

あの向うに。

肩に光が乗って、

とつてもいかすんだぜ！

君！ 何故そんな事を考えるの
む？ 僕はね

将来は必ず行くからさ

僕はその為に生きてるんだぜ
分かるかい？

地獄！

それは俺のあこがれの

渦巻く血の海

あふれ出る血の川

切り立ったガケにはえる

針の枝

どこまでも続く

髪の原

そして闇を行き来う

火の車

それらが全て俺の望みなのさ

そうなんだ

俺は地獄の大王になるんだ！

そうなんだ

俺は地獄の大王になるのだ！

ワッハハハ……！

ワッハハハ……！

空の下に、もう

影はなかった。

場末で

ごみごみした通り。

せまく、迷路の様に。

その一画、果物屋

路にまでつまれたみかん、りんご

その間を走って出て来る男、一人

暗い奥のカーテンがゆれている。

通りをうめる人々、多数。

その間を走ってゆく男、一人

ゆれるカーテンの裏から

「裏切りだーあ。それじゃまった

く裏切だよー」

「あいつめ、また何かしでかした

な。とつかまえてやる！」

「面しれエ、俺も行こう」

「あれは私に言ったよ。陰口をネ。うそだったのかい。そうだ
ろうよ、あたしや始めから信用なんかしちゃいなかった。うそ
つき野郎メ！」

「まあー、あの人。私にはとてもいい人だったのに。間違

じゃないのかしらねエ。」

「何だって？ まあ馬鹿だヨ。あれは言ったよ、あんたをすぐ調子に乗るみえっ張りだってね。こうも言ったサ、自分を知らないうぬぼれ屋だともね。まったくあれは目が正しいよ。」

「……（ふん、何て勝手な事を。）」

「おい、あいつが何をしたってうんたい？」

「ああ、あの家の秘密をしゃべっちゃったのさ。それを知らないのかい。町中に知れちゃってるぜ。その秘密おしえてやるるか。たいした事じゃないがねエ。」

「ああ、ああ、まってくれ。まってくれよ。それでその秘密を知らないのは俺だけだっていいのいかい。知ってるぜ。知ってるんだからその先は言わないでもいいんだよ。無駄なんだからナ。」

「あいつめ、とうとう皆からしぼられるってねエ。もっと早くにそうすりゃ良かったんだ。そう思いませんか？ わたしや言ってやりますよ。このコウモリ野郎め！ ってネ。あんたどうです？」

「私もそう言ってるやうだが、止すだろうよ。可愛そうじゃないか。普段はあんただってあいつと楽しくつき合ってたじゃないか。あいつあー悪口も言ったけど、そりゃ、もう性質なんだヨ。あんた何が気にさわってるんだね、エー。まったく気の毒にな。」

程の事じゃあるまいになあ！。ああ今ごろ何してるだろうねエ。」

「結構どこかで楽してるヨ。あたしやここから出てゆきたいんだよお。前から思ってた。あれのは悪口じゃないんだよ。あれにや人を見る目があるのサ。本当にネ、本当にここはああいう奴等のたまり場なんだヨ。オオいやだ。」

「ああ、まったく。」「お前さんも、その一人サね」

「母さん、見とくれよ。このアメ小父さんからもらったよ。」

「よかったねエ。いつか言ったらう、いい人なんだって。」

「うん。母さん。僕、小父さんを好きだよ。」

「……そうかい。」

せまい通りに一つあわただし町に店を閉めた家。

ねがい

三年 船水洋子

万葉の人々のように
生き生きと
行動的に

「それ、それがいけないよ。ありや言ってたよ、隣のダンナは気が小さい、それだから洗濯なんかを毎日しなきゃならないんだってサ、フフフ。」

「こんな事で時間をつぶしたくないヨ。仕事があるんだよ。」

「気の毒に、気の毒に。」

「ほけなすめ。まったく意気地がないよ。」

「母さん、あの小父さん、広場で皆に説教されてるってね。」

「お前、あんな風にならないでくれよ。あの人だって仲々いいんだヨ。ああ、豆が吹いちゃった。雑布取っとくれ。」

「母さん、小父さん僕にアメくれたよ。いつだったか？」

「だから言ったら、いい人だって。早く雑布取っておくれナ。」

「はい雑布、僕は小父さんが好きだよ。母さん。」

「そうかい。」

「あの人のごろ随分とおとなしいじゃないの。私の所へあれから二度ばかり来たけど、すっかり心を入れ変えたらしいわねエ。」

「わたしやそうは思いませんね。今に見てごらんさい。前と同じになりまさあーね。この前も私の所へ来ましたが、あんたどうして、前とほとんど変わリませんヨ。」

「あの家の人達はどうしたんだい。逃げちゃったのかい。それ

恋してみた

そしたら私にも

あのような相聞歌が

うたえるだろうか

そんな気持ちに

なりたいた

愛する人に

男への憎しみを忘れ得るように

なりたいた

愛と憎しみは表裏一体だが

憎しみだけを

消してしまいたいのだ

そして

生きたい

人間くさく生きてみたいのだ

朝

二年 秋本久代

あすに希望を持とう

夜がある から

朝は必ずやって来る という

夕暮れ空に

五色の夕焼

希望と勇気の結晶だ

今消えてもいいではないか
あすは来るのだから

赤く染った西の方
あすを奏でる音がする。

巨大なビルの下に
小さな虫けらがいる
ごらん虫けらが動く
あすへのために 働いている

夕焼が輝き
虫けらが働く
人間があすへの希望を持ち
夜が来る。

ごらん太陽が昇ろうとしている

静

二年 渡辺 雅子

華やかな光の乱舞が消えて
夜ふけの静気が広がる
まぶたに残った光の輪が
静かに消えてゆく

追るような静けさが
私を包む

突然起こった恐怖感が
私をうろたえさせた。
絶えきれないままに
一本のマツチをする。

ゆっくりと一筋の炎があがる。
すぐるように、

近づけた目の前に
ゆらりとかたむいた
炎が消えて、
またもとのくらやみにかえる。

ニューと顔を出す前に

小鳥が鳴いて教える

君にこの喜びを分けようと

牛乳やがカタカタと音を立て
一番電車が動き出す。

ごらんその間に太陽はより輝く
この一瞬を
この一日の始まりを
偉大に輝く太陽を

ごらんもう輝てはいない
明るいだだけだ

虫けらがいないた
もうなかないだろう
どこかで井戸水のポンプの音
昔の朝の始まりの音だ

太陽は昇り
朝は終った。

追るような静けさが
私を包む



山歩きの緩徐調

晩秋の

三年 松野 祐三

或る寒い日
私は行ったんです

「何処へ」

奥秩父です

「ほう」

雨が降っていました

豪雨でしたよ

「そんな雨に

何故行ったんです？」

きつと

山に飢えていたんでしょね

視界は零でした

歩きました

何キロも

何里も

アノラックが

びっしょりぬれて

地肌まで

雨がしみこんできましたよ

「大変でしたね」

でもね

大したことじゃないんです

雨に濡れても
けっこう楽しいんですよ

そのうち

赤志に着きました

「赤志……赤志？」

そう

部落の名前です

奥秩父の最奥の部落のね

でも

部落といつても

小屋が一軒あっただけですがね

でも通り過ぎてしまいました

それから

歩きましたよ

何キロも

何里も

やっと

峠にきましたよ

「峠……峠？」

そう

雁坂峠です

もう

日が暮れかかって

薄闇が押し寄せていました

そうそう

雨が

いつの間にか止んでいましたよ

「そりゃ、良かった」

まあそうですね

雨が止むと

南の山ぎは

雲が切れましてね

南から西へと

横に切れた雲間から……

真赤な夕焼が

それは……きれいだった

「そうですね」

その美しい夕日に

抱きかかえられるように

雁坂小屋に入りましたよ

夕日は

いつまでもいつまでも

小屋の正面から

あかあかと照りつけていました

本当に本当に

美しい落日でしたよ

「すばらしいですね」

小屋で

着替えをすませて

すぐ寝てしまいましたよ

シュラフがあったかくて

ぐっすり眠りましたよ

その夜は

ひどく冷えこみました

でも

満天の星は

明日の快晴を

約束してくれていましたよ

おやすみ

「おやすみ」



清流

三年 高井 一枝

もう何年になるだろうか……

私が、都会の騒音の中の神経の焦立たしさを、忘れる為にこの村を訪れたのは……

すっかり、今では変ってしまった。

私が前に来た時は素朴な古い封建性の抜けきらぬ自然のままの村だった。そして……、私はその中で一種の人間を見つけることが出来たのに……

二十一才の冬、私が訪れたその村の冬は早かった。

既に回りの山々は白い帽子を被り田舎の温泉村は、町の賑やかさを忘れたかのように、ひっそりとして寂しいものであった。

私の泊っている旅館の、前の川は谷川からの、手を切るような清水がいきおいよく音をたて、夜昼となく流れていた。

旅館のサービスは余りにも良いとは言えなかった。二枚の敷ぶと

その日、風呂には二人のこの土地の百姓が入っていた。そして私は、土臭いこの若者の会話を耳をついとなく傾けてしまっていた。

「いつ帰って来たんだ？」「なんでもよ、一昨日とか、本家の婆さん言っていたな。だけど、すごい服を着て帰って来たって、婆さん怒ってよ……」

この辺の娘が見たら驚くべくな、どんな服を着てきたか知らねど……。「ほんなら俺らも一度見なくちゃなんねえな。村の青年団としてよ……」

笠原の本家に泊っているんだろな？」「ああ、そうだな……」

「沙代も綺麗になったべな。東京に行つて、もう二年になるんか。」語尾に強いアクセントのある方言を残して、三人は出て行った。その話はふと私の心に興味を感じさせた。

「沙代とか言っていた……」田舎の若者がわざわざ彼女を見に行く程東京に行つて来た娘はいいのだから……。「私は我ながら妙な気持ちでこの沙代という娘に興味を持ち始めた。なぜだろうか分らなかった。孤独の心がそれに興味を感じ始めたのが……」

私が風呂の中でこんな事を考えていると、薄い杉板一枚で仕切られた女湯から、その沙代のうわさをしているのが、湯気の湿で響いてきた。

それはどうやら、この旅館の女達らしかった。

「沙代さん綺麗になったんだってな。さっき信二が健太んとこ来て言っていたで……」

「沙代なんか、東京で何してんだが分りもしねえに……」信二もそういう事は良う耳に入れてくるわ……。「」

「だけんどよ、東京なんて、わしらめったに行けんもうな、わしなんかもういつ行けるんか分りやせんし……」

「沙代……」私は益々この見たことのない女に興味を感じた。

「いや、東京に住んでいるなら会ったことがあるかもしれない。街

んは薄く、たたみの冷たさが感じられ、掛ぶとんは私の体には重すぎた。その上、食事でも悪かった。だが、私は我慢した。俺が良くて、こんな所に来たんじゃないか。どうせこんな寂しい温泉村じゃ何もないのがあたりまえさ……」

だが、一つだけ私にとって有難いものがあつた。それは、常に暖かい湯が溢れている風呂であつた。

私の部屋から、寒々とした古くさい長い廊下を曲り、突きあたりの暗い裸電球の灯る細い階段を降りて行くと、家族風呂が左のせせらぎの横に小じんまりと一つと、奥に十坪程の一般風呂が待っていた。私はせせらぎの横にある家族風呂に、二、三回入った。

明かるい昼間、冷えきってしまった体を湯に浸していると、回りの葉のない樹木が、風のささやきに私の心を楽しませてくれた。

が、夜のそこには私の冷えきった心を一層孤独にするばかりだった。風呂場の湯の湯もやに隠れ、外の景色は暗くぼんやりとしていた。今に窓の下から何か、何か……それは漠然とした何か、であつた。

「が、出て来るのではないか……」そのような考えがエイリに焼きつき始めてきた時、私は、どうにもならない程自分というものに恐怖を感じた。今これではいけない……もっと自分に自信を持たなくては……。何か、——人であるか？——を怖がっては……」私はそう思い次の日から一般風呂へ入ることにした。

ある晩。こたつの中の夕食が残り、私はすぐに風呂場へ向つた。この旅館の泊り客は私を入れて七人で、いつもその風呂場は空いていた。

角ですれ違うこともある……。よし、俺も明日天気が良ければ行つてみよう。笠原とか言っていた。この宿屋の誰かに聞けば分るだろう……」

風呂を上ると、冬空は高く冷く澄み渡り、星が底知れぬ程輝いていた。ああすはいい天気だぞ！私はずぶやいて寝心地の悪い床にもぐりこみ、小説を読み始めた。

翌朝、食事を持って来た太ったこの部屋つきの女中に、私は「笠原って、遠いの？」とたずねた。すると、女中は「ええ、一里無いんです。牧さんの足でしたら一時間あれば充分ですが……」

何か用があるんですか……？」と逆に問い返した。「いやなんでもないけど……、ちょっと耳にしたから気晴しに散歩でもしてみようかと思つて。」

私は白ばくれるのにあわてたが女中は私のあわて方には気がつかないらしく、「そんなら幸ちゃんが今日行くつて言つてたから一緒に行くといいです。そうたのんでみますんか？」と親切に言ってくれた。私は笠原という土地はここに来てからも行ったことがなく、まったく知らないのですの申し出に喜んで応じた。

宿の仕事が終わった。十時過、私達は小春日よりの山道を笠原へと足を運んだ。

「牧さんはなんで笠原なんぞに行くんや？」と三女の幸子が歩きながら私にたずねた。私は今度はあわてずに、彼女の問いに答えることができた。「うん部屋にいと陰気臭くて病気になるさうだからね。今日は暖かいし、久しぶりに冬の写真でも写そうかと思つて……」

「へえ、牧さん、写真写せるん？」「あ、でも、変な写真ばかりだけだね。ところで、幸ちゃんは何しに行くの？」

恐らく、彼女もあの沙代とかいう女に会いに行くのだろう。私のそんな予感が頭に浮びながら幸子に尋ねた。「あたし。東京から笠原の本家に同級生が帰って来たから行ってみるん。」……、「昨日、村の人が話していた、沙代さんとかいう人？」私はためらいもなく彼女の名を口にする事が出来た。「なんで、牧さん、沙代の事知ってるんだ？」彼女は驚きを顔に現わした奇妙な表情で立ち止った。「そりゃ……風呂の中で昨日の晩、耳にしたのさ。大部にぎやかに話していたからね。……。東京に長い間行っていた人ってそんなに珍しいのかい？」「そんなことってないけど……、沙代は別なんさ！」ゆつくりとまた坂を登り始め、幸子は話した。「沙代ちゃん、新宿の喫茶店に勤めているって言う話だからさ……。田舎にいた時も別嬪だったけ、うんと綺麗になっちゃっただろうな……」東京に働きに出、古いしきたりの村に帰って来る若い娘や青年が物質的、精神的に封建的な村に少しづつ変化を齎らすということは何か小説で読んだことがあるが、実際、自分でそういう若者を見ることは今までにはなかった。また、それを経験できる程、その頃の私は年寄ではなかった。そして私は幸子と並んで歩きながら、娘を見たいという切望に、益々かられてくる自分が知らず知らず愉快になつていった。

幸子に紹介されて、沙代に会つてみると、この附近、いや東京でもあまり見られないほど、白い襟首をマフラーの間からのぞかせ、彫りの深い、面長の顔をしていた。美人ではあるが、それはむしろ神秘的な、例えば雪女のような美しさのように私には思われた。怪

しい魅力。そう、この村ではそう思われても仕方がないだろう。東京にはあんな娘はさらにいる。BGにしろ、工員にしろ、皆、あくどい化粧をしている。けど……、彼女ほど美しい、白い滑かな肌を持つ女は少ないだろう。

慣れてくると、私は沙代と気軽に話すことが出来るようになった。……東京に二年も住んでいたら、自然、誰とも気軽に話すことができる。なのに、俺は人と話すことがおっくうでなかなか話す気にはなれない。しかし、この女には……、話やすさがある。雪女のように神秘的だからだろうか……。

私は幸子と二人で話している、彼女のポートレートを何枚となく写した。そして彼女の家で、遅い昼食を御馳走になった。そうするより仕方なかったのだ。これは弁解ではない。寒くて、腹は空くし幸子は始めから彼女の家で昼食を御馳走になるつもりだったらしい。

夕方になるのが、この土地では早かった。山々に日が隠れだした三時頃、私達は笠原を降りた。

私は旅館に帰ってすぐ、近くの、帰り道に幸子から聞いた、薬屋に現像と引伸しを頼んだ。翌日の夕方出来るという薬屋兼写真屋のおやじのぶつきら棒返事でも私は喜んだ。

翌日の夕方、写真が出来て間もない頃、沙代が、最終で東京に帰る、と言って、幸子を訪れたついでに私の部屋へ立寄ってくれた。そして、私は出来たばかりの写真と彼女に渡した。彼女は「写真を貰うなんて久しぶりだわ。」と言って喜んでくれた。私は彼女が上京するといふのに寂しさを感じた。そして彼女に「沙代さんは東京の

どこに居るの？」と尋ねた。「私？新宿のクカコッっていうお店で働いているのよ。知っている？」と無邪気なく聞き返した。僕は良く新宿は歩いているけど、知らないな。どっちの方？」「あまり、いい所じゃないのよ。御苑の方なお客さんは安サラーマンが多いわ。時には学生さんなんかも映画の帰りには寄るけど……。」「じゃあ、僕は行かないな。歌舞伎町や中央通りの方がいいからね。親の腰醫って遊んでいるけど。」「親の腰醫りは良くないけど、遊んだって悪いことないわ。働いてね。私なんか、田舎で働いても狭いばかりで仕方がないから、高校卒業してすぐ飛び出して来ちゃったわ田舎のうわさの渦に居るよりお店で働いた方がよっぽどいいわ。そうじゃない。古くて、狭くて、一つも古さというものから解放されるという事の中にあるより……、自分で苦しくても、どんな仕事でも、働くという事の方が大切で……。私、東京に飛び出して行って、本当に良かったと思うわ……。」「そりゃ、たまには悲しくなることもあるけど……。」「俺より二つも年下なのか……うらやましいほどはつきり言うな。」「今度、君の店に行つてみようかな。東京に帰つたら……。」「ええ、是非、いらつしやいな。東京で知っている人って言つたら、お店の方はかりだから嬉しいわ。いつ頃来て下さる？」「僕はまだ、十日程いるつもりだ。帰つたらきつとすぐ行くよ。」「そう、私は今夜、帰るの。そんなにお店休めないもの……。それに、村に長くいると思いうわさしか残らないし……。母さんなんて、可愛想だわ、私があんな所で働いているから、肩身の狭い思いしているのですって。だからいやなのよ。田舎って。どんな仕事をしていても、自信を持てばいいと思うのだけどな

……。「沙代は女中が夕食を持って来たので、別れを告げた。

それから数日して、私と沙代の噂が広まった。それは、どうやら写真屋のおやじがああ写真の事で輪をかけて、近所の村人に話したらしかった。そう、噂はガソリンが燃えだしたほど、大きく広がって行つた。そして、私はその噂が耳に入った翌日早く、帰京した。バスの停留所には、幸子が一人、軽いショルダーバッグを持って、送ってくれた。

私が東京へ帰って、友人と彼女の店を訪れたのはそれから二十日程過ぎた、厳寒の夜だった。

その店は、七坪程の小じんまりした落ちついた店だった。彼女と同じような女が四人働いていたが、彼女の美しさに勝てるものはいないようであった。沙代はそこで、「仕事」に沙代らしい自信を持って、力強く、明かるく働いていた。彼女の魅力はこの店で充分発揮されていたが、それを否定しようとはしなかった。

私達、悪友グループがその店に通い始めて、五ヶ月程だった初夏の夜、沙代は勤めの帰り追分の所で酔っぱらい運転の自動車にはねられ、即死してしまつた。私達はその夜、沙代の店を訪れたばかりで、私は啞然としてしまつた。

それから、あまりにも長い年が過ぎてしまつた。

私は十数年振りに出張の途中で、この村に立寄つてみた。そして、すっかり変つてしまつた村に、ただ眼をみはるばかりだつた。ダムが出来たその村は昔の面影は消え、観光ホテルが湖畔に立ち

並んでいた。

人工湖の底にねむる古い村は、沙代のような若者を何人生みだしたのだらう……。自信を持ち、力強くこの世を生き抜いて行こうとする若者達を……。

私は今、妻と二人の子供を持って自分の生活に満足している。早く仕事を終らして、東京の暖かい家庭に帰ろう。自分の生活の場に……。

——完——

思いつくまま

三年 光 本 信 輝

受験を目前にひかえた現在、スランプに陥っている僕の様子はこの三年間を深く反省してみる心のゆとりなどないし、三年間の勉強がたたって最後の試験にも押しつぶされようとしているのである。ずっと以前からの習性で、今では致命的な性格ともなっている怠惰が、最後の追い込みであり、一生の分岐ともいべき大切な今、一度に襲いかかって来た様なものである。

僕は五人兄弟の末っ子で、すぐ上の兄とも年は大分はなれているので、母の愛情を独占することが出来、温床的に育てられた。それ故、全幅の信頼をもって人にもたれかかる、人に何でもやってもらうことが自然的に悪い意味で養われたのだ。そうして気の弱い、決

断力の乞しい一面を現在に至るまで所持することになった。所謂人の心の機微に触れることには敏感なのだが、現在のように受験という確乎たる信念をもち、それを最大限におし進め、雑事を除いてしまおうという意志力の必要にせまられると、すぐはこ先は曲ってしまふのだ。

僕は二年のはじめに、ある地方の小都市から上京して来たが、この学校に入って明るい気分になったことは確かである。女生徒の数のせいばかりではない。自由放逸な空気、これはありがたかった。母の干渉がいかげん鼻についていたのである。が、しばらく過すと変に浮ついたものが感じられて、以前がなつかしく思われた。向こうの友人の手紙をむさぼり読んだのもこの頃である。又、少したつとこの学校に同化した。良い面、悪い面（この方がはるかに多いのであるが）につけ行動して来た。そしてこれは直接的ではないが後輩にあたえる影響は大きいのである。

ある人が高校時代読むべき本を選択してくれたので、それを指針としてかなり読んだつもりである。しかしながら粗読で、筋を追うことに終始して、どの程度身についたかは疑わしい。僕は名代の浮薄分子だが、これによっていく分かは心の落ち着きを得たと思っている。そして感謝している。

三年間アツという間に過ぎたというのが本音であるが、残りあと十日、人生の停滞点になるかもしれないが、できるだけの努力はしてみる積りである。

一人優親友愈多勢愚友

一年 森 幸 四 樓

人生より友情を除くのは世界より太陽を除くに等しい。（キケロ）友情は世界になくてはならない、太陽と同じ位大切だ、と言うのだ。

又、

その人を知りたいならその友達を見よ

（荀子）

人は自分と気の合った人を友達に選ぶもので、その人を知りたいならその友達を見ろ、という意味で、友達はその人の影の様なものであるから、友達は立派な人を選べというわけである。

友人を持つと言う事は人間の人格形成上からも、精神面においても、最も大切な事の一つである。

友人には善友と悪友とがあって、前者は、主に高校時代つまり僕等の年頃位から精神面を通して結ばれている友、後者は、少年期に多いいわゆる「わんぱく仲間」の事である。しかし、高校生である僕は幼い頃からずっとこのかた、後者の悪友の方に多く恵まれていた様である。又自分でもその方を、好んでいるのではあるが……。授業中に共に抜け出したり、下校時に寄ってはいけない飲食店であるミルク・ホールにも寄り、柿や栗をチョット失敬して農家の人に、おいかけれ一目散に逃げ走るのも悪友と共だ。

しかし、僕には悪友の方が良いのである。善友の様に一々注意や指適や忠言を言ってくれないが、僕には悪友の方が性に合っている。

今まで「悪友、悪友」と、言っていたが、「Birds of a feather flock together.」

（類は友を呼ぶ）で、悪友は悪友で集まるものだ。僕も僕の良き悪友から見れば、僕も大きに悪友なのだ。時にはふざけもし、いたずらもし、異性の事もしゃべり合う。言葉も極めて乱雑だが、そんな事は一つも気にならず、何をするのも悪友同志、悪友と共ならいつも楽しい。そんな友達でも良いのだ。

「君子の交わりは、淡きこと水のごとし」という格言があるが、これは、君子の付合には金銭が伴わず、純潔だという意味だそう。しかし、悪友との付合には、時には金銭が伴う時が往々にしてある。時にはワリカンで、時にはおごらし、時にはおごってやる。悪友との付合は簡潔である。

善友にしろ悪友にしろ、ただ言える事は、気の合う人と友達になるのが一番良いのである。そして、欲が深い人、嘘をつく人、酒を好まず飲まない人、個性が強い人、と感じた人は友人に向いていないのである。今の僕には、僕を批判してくれる善友は重荷である。又僕の性に合わないのである。



「大ぜいのくだらない友達を持つよりは、ひとりのりっぱな親友を持つ方がはるかに良い。」

— アナカルシス —

歩 く

二年 新村 弘

ますます灰色に包まれる道、ずっと向こうのどんぐりの木も黒く
なってきた。枯葉を踏んで歩っている自分。そのからからが足に吹
きつけて遠のいていく。西の空に星一つ。無限が一つ穴のあいたよ
うに……

歩く。冷たさがそれに加わる。この冷たさもあの穴から吹き込む
寒さだ!! 歩く。それは一つの動であり運命である。

この一本のまっすぐな道。それを人間は一步一步、歩かねばなら
ない。それが生きることであるからだ。もうどれくらい歩いたこと
だろう。自分の後には目に見えぬずっと長い影がついている、それ
はあの遙か向こうにあるあの灯の光のためだ。「あの灯はなに」
「うん誰も見た人はいないんだ。」自分は歩いている。「何のため?」
「生きるためさ。」「死ぬためさ。」

東の空から月が出た。丸くって大きくって黄色かった。きれいな
月だ。この光は自然の光だ人間には創れぬ自然の光なのだ。

そこには幻想の世界と現実の世界とがある。きれいな世界だ……
又寒さが加ってきたように感じた。気がついて見れば自分はこの途

……

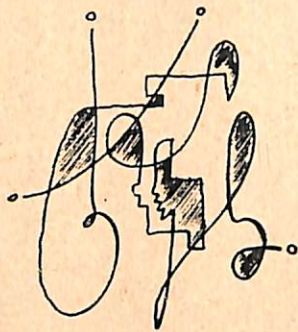
又歩き始めた。今まであったあの黄色い月も今はすでに色あせ、小
さくなり、一つの星が何百倍にもなって分散している。灰色は黒に
変わり寒さは痛さに変った。それはみんな生きていく証だ。その
中で自分とこの長い一本道だけが変わっていない。それは不自然で
あり当然であった。絶対の世界の自分、それは小さく弱いものだ。
自分だけは歩けなくなるかも知れない。そう思うのも人間である。
何か杖がほしい。杖があったら。無意識に道端を捜し始めている。
でも杖はなかった。やっぱり頼れるものは自分一つだけだ。仕方な
く歩き始めている自分。その灯を求めている自分それは敗北者であ
り勝利者である。……

もうどれくらい歩ったろ

う。月は真上を過ぎた。で

もあの灯は近づかない。こ
れが本当であり現実である
と思った。夢想の世界の英
雄そして、この現実の敗北
者それは生きていくことに
連なっているのだ。夢想世
界の現実、いつかこんな言
葉を聞いたことがある。

絶望に歩く。「何のために」「生きるため」「死ぬためさ」「お前
の求めているあの光。馬鹿な奴さあれがお前の理想の世界だってノ
頼りになるってノ あれはねノ 墓場さノ 墓場の冷たい光さ。」



方もない長い一本の道に一人きりで立っている。それは一本の水柱
のように冷たく水さえ張ってきている自分が立っている。「歩かね
ば、早くあの明るい光の所へ行かねば。」又歩き出す。途方もない
この長い一本道を一人きりで、気づけば今は自分の心があの暗いよ
うな明るいような灯の探索よりもそれに致くことだけを考えてい
る。一人ぼっちの寂しさ。一人ぼっちの冷たさ、それが自分の心に
暗さを与え、そんな心になっている。

……

歩く。今は何も考えずに歩いている。ずっと向こうのあの灯
をたよりに。それがどんなものであろうとあの灯より他に頼るもの
は何もないのだ。あの美しい黄色い大きな月。それは現実にはあま
りに冷酷である。この道を照らす物であって自分を動かすそれには
ならないからだ。そこには現実のそれと、幻想のそれが互に消しあ
った世界なのである。

遙かへなれたずっと後の方から大勢の歌い、笑い、踊る声が風に
乗って自分におしよせる。それは夢想のようで現実であることはす
ぐにわかった。その声の出場所それは天国か地獄か。それは自分
にはわからない所だった。でもそれに多くの引き込まれる自分、や
ゝもすればその怪しい声にこの冷たく暗い道を引き返されそうになる
自分それががゆかった。こわかった。これには一種の魔力といお
うか魅力と言おうか。そんなものがあるのだ。何ぞ引きよせられ
る! “すぐ分った” 孤独な人間に対する大勢のそれは夢想である
にせよないにせよ大きな魅力があるものだ。これは不朽の真理とど
も言おうか。——「引き返してはならないあの灯はどうする」……

「冷たい光。」思わず口から飛び出した。この言葉、それには疑問
と否定と肯定とが一時に入り混って耳に響いた。でも自分はそう思
いたくなかった。たとえそれが不朽の真理であってもそう思いたく
なかつた。それを暖かい灯に感じたかと思えばいつでもそう思っ
て今まで歩ってきたのだ。そこに人間の喜びを味わいたかつたか
らだ。人間、それは決して万物の霊長ではない。ある点では確かに
それである。だが反面、獣にも劣る面があるからだ。……しかし人
間としての喜び、それは希望、生きるそれである。

すべて長い旅は死ぬまで続く。暗闇、一本道の冷たさ、悲しさ、
光る月、大勢の歓喜の叫び、そしてあの灯と自分。そこにはたえず
さびしさと恐ろしさと不安とが繰り返されている。だがこの半絶対的
な世界で何のとり得もない自分にとって一番の力付けの道具、そ
れは、青年の持っているこの、白く細長く弱い糸のような純真な氣
迫と愛ではないだろうか!!

物事を卒直に考えられる人間、それが青年であるのだ。それは氷
にとじ込められた灯のようにいずれは消されてしまうかもしれない。
幾多の文学青年が自然と人間とのアンバランスに苦しみ、人間の
純真さを誇り、その純真であるがためにこの長い一本の道で倒れ
伏し世を去っていった。そこには真の人間があり、真の世界がある
のだ。純真であるがために世を去った彼ら、そこへは世間の冷たい
風が、雪が容赦もなく吹きつけていたに違いない。それが現実なの
だ。……その一本道を自分も自分なりに歩いている。一人で冷たい
あの灯を良いものにしろ悪いものにしろ求めて、そこには、一生た
どりつかないかも知れない。でもそれがきつと暖かい人間の真の灯

ることを疑わない。疑っては杖なしに歩けないのだ。自分はそんな弱い人間である。真暗な道、いつの間にかあのどんぐりの木も遠くに点になって見える。そこには枯葉が今も吹きつけているだろう。どうやら今は自分の足には枯葉もなにもからみ付いていない。星はいざんと輝き、月は蕭条と光っている。でも冷さだけはどうかやう遠のいた。それは希望を持っているからかも知れない。……歩く歩く!! あの灯を求めて……それが運命であるのだ。

下田山風流記

三年 山本 美南子

下田山。それは私達一家の生涯の居を定めた所であり、その自然は限りなく美しく豊かである。

「春」

春来むと告げむばかりに

うぐいすの

なききそひあふ下田山里

ここの春はうぐいすの声に始まる。

春まだ浅く、朝は寒い、丁度一月一日の朝だった。ねぼけまなこで着がえをしている私の耳にかすかに発声練習なのか、うぐいすのひなびた声。「お母さん、うぐいすが……」私は洋服を着るのも、

もどかしく下へおりた。

自分の家で、うぐいすの音が聞けるなんて……心はずむ嬉しさ。それから毎朝、うぐいすのさえずりに明けるようになった。

だが、はじめの頃はやはり下手だ。けれど、それでいて、なかなか愛敬たつぷりのさえずりである。それも日、一日と上達して、まともなうぐいすのさえずりになり、この山里暮しをこよなく楽しいものにしてくれた。

たわむれに真似て、口笛を吹くと、あっちからもこっちからも、返事をしてなきかわしながら、高いのから低い、また上手なのから、いまだに「ホケキョ」のキョが出ないで、いつまでも「ホーホケホケ」だけの愛敬のあるのから、だん／＼に近寄って、一きわざえずりも高くさえた音色を、ひびかせる。

ボカ／＼春の光もあふれる縁側にねころんで、うぐいすとたわむれるのも又ここ山里暮しでなければ味わえない特権でもあらうか。雑木林の木々の枝先には、ブツ／＼と新芽のふくらみも見えて、春はまさに、はじまろうとしている。うぐいすにまじって時々、こじゆけいの、けたたましい声があたりの静寂を破る。その「チョットコイ、チョットコイ」というなき声には、聞く者を皆ちよつと行つてみたいような気にさせてしまう。

勉強に、

あきてねころぶ我が耳に

ちよつと来いと誘いけるかな

続いて、じょうびたき、尾長等々まだ名前すら知らぬ見たこともないような美しい野鳥の群れが、ここを訪れてくる。

東の麦畑からは、あくまでも、のどかに、自然は限りなく美しく、山陰を紅にいろどる八重山椿は道一杯に花びらをまき散らし。

山里をふくいくたる匂に包む清楚な白梅、都座を離れ、色も一きは濃い桃色の、田舎娘のような、ひなびた桃の花。

幾十年、年を経たのであらうか、太い幹にささえられて、幾筋も地にまでたれた薄紫の山藤と、次から次へ、あく事もなく、やがて遂に雑木山にも一斉に新芽が開いて、うす緑に、かば色に、黄に、もえたつような、新緑となった。

「夏」

夏は何といつても緑。

しょうぶ田にツキ／＼と剣立った葉の間から遂に、あざやかな紫と白の花が開いた。

両側から追々と埋めたてられ、住宅地に置きかえられて、せばまれて行く。わずかな田圃もいつか、ならされて、一杯の水をたたえている。

かたわらの苗床には、うす緑のかわいい苗がビッシリと生え揃った。

お地様の庭一杯に、降る程の白い花をつけたこぶしも、今はもう大きさは葉をドサツとひろげてしまった。「夏も近づく八十八夜……」あの歌の文句の通りの夏姿がここにある。

夏休みに入ってから、ひぐらしに印象づけられる。ひぐらしの

なきかはしあふ山かひの

下田の里に夏来たならし

暑い日中、暑い／＼と言っている時に、ひぐらしの音がしはじめると、もう夕方かと、それだけでもホッと涼をおぼえる。

一面のひぐらしぜみの中にはや暮れむかしばし手を止むひぐらしも、うぐいす等と同じに、その声、調子には、いろ／＼特徴がある。

耳をすまして聞いていると、なか／＼面白い。そして、彼等には群衆心理があつて、決つて三時から五時にかけて一匹なき出すと、とたんに目がさめたように声はりあげて、なき競いあう。家に来たある人が「なか／＼風流だ。」と言った。

ひぐらしの

なくや下田のわび住ひ

だが、風流は良いが余りにも静かで、のんびりしすぎ、時には眠気が先に立つ。

解き悩み

はてはごろりと昼の夢

夜ともなると、いつしか鈴虫、くつわ虫、松虫、こおろぎ、などの虫が早くもなきはじめ、その細い弦のひびきに耳を傾ける。

また、夜もふけてくると、ふくろうの声もしてくる。

山里のしじまをぬひて聞えくる

ふくろうの声夜も深みぬ

一般にふくろうときくと、無気味な声ということになっているが、ここにいるのは「このはづく」といって、普通のふくろうより、一まわり小さく声も低音の無気味さより中音のボウ／＼と

いう声は、愛敬もあって、夜もふけてくると待たれるものの一つである。

春中、山々をにぎわした、こじゅけいも沢の水ぎわのやぶへ道のいた。

バスを降りれば

早や我家や山かひの

木陰をわたる風も涼しき

木々は緑をいやまして涼しい憩の陰を、たつぷり作ってくれたが、秋を告げる風と共に、無残に地にたたきつけられた、ちぎれた葉をみる朝もあった。

一しきり

ひぐらしぜみの音をとめて

葉音も高く時雨通りぬ

ふくろうの声も、とだえがちになり、山の姿も秋に移って行くのであるうか。

「秋」

山本家が引越して来たのも秋である。

そして丁度一年。どうやら下田山の閑居も板についてきたようである。

ある。

山あいに一年すぎて花も鳥も

木々の色にも心かよへり

ある人が「田舎だ」と、もらしたことがあったが、まことに田舎である。

ちょっと俗界を離れたような所である。

それ故、引越した当初は少し心細い感じがしなくてもなかったのだ

が……。そして雑木山の栗の青い、いがが大きなと本当の秋である。家へ帰ると早々に、やぶをかきわけ、栗ひろい。それこそ濃い栗色のころりとして、丸い小さい実が草むらにある。

山の栗は小粒だが、身がしまっていて甘くて大変おいしい。ほとんどは、こじゅけいの食物になるのだろうか、その前に人間様によってあらかた、たたき落されてしまうとは……。

それでも、あとに残ったのは、いがはじけ、いつのまにか庭におちていることが多い。

秋空にいがも色つき朝毎に

小さき栗を庭にひろへり

十五夜。それは、こんな田舎では本當にびたりくるものだ。すきはどこにもふんだんにある。そして、ワレモコウや水引草、野菊等、取り合わせる野草にも、ことかない。

目は東のやぶの、丁度からかさ型の、私達はからかさ松と呼ぶ松の梢を、あか／＼と染めて上って来た。

西の雑木山が一時に照らし出される。

名月の照らせるままに明り消し

よぎる光を染しみにけり

それと共に、下田山の秋は、いよ／＼深まってゆく。はぜの実

真赤に色つき、尾長が再び木の実を食べに来るようになった。

そして幾本もの木せいの芳香が、あたり一面にただよいはじめ

る。

全山を香りにつつみ木せいの

花ざかりなる秋日和かな

朝早く、そして夕方の行き帰り、木せいの香りに送り迎えされる。

都心を電車でわずか二十分たらずで、この様な隠された自然そのままの村落があったのだ。木せいが咲きはじめる頃には、あちこちの農家の庭や山陰にある柿の木に小粒な赤い実が枝もたわわに実る。

柿の実のたわわに実り色づける

梢に高くもすなきさわぐ

せばみゆく稲田も実り年老ひし

農夫のよりて稲を刈りおり

この頃になると、からす、雀の声にまじって、時折鋭いもすのなき声があたりに、こだまする。

朝晩は、それとともに、ぐっと冷気を加える。

台風のおかげで、早目に葉を落した、ほうきの様な、けやきの梢も、春よりは、なお一層その枝先に細かさを増した様だ。

松やけやきの高い梢に、それぞれ陣取って、けたたましくなきたるもすをみると、「そろそろ冬だな……。」としみじみ感じる。

そして、そんな頃忘れていた物をふとみつけた様に、家々の庭先や生垣に、白や薄紅色の山茶花が開きはじめた。

朝早く、首をすくめて、道を急ぐ私の目に山茶花のかわいらしい花びらが足をとめさせる。

一ゆれたハラリと散れる風情して

雨にぬれつつ山茶花の咲く

日一日雑木山は色づいて、その褐色の葉は、すでに枯れてなくなった下草の後を埋めて、山一面に散りしいた。

「冬にむかいて」

木枯しに

吹き寄せられしもみじ葉の

又ちり／＼に吹かれ行くなり

赤く色づいた木の中で、うるしは、真先に散っていった。

今は紅葉と山柏が裸木の間をいろどっている。夕暮とともににはいるよる冷たいもやの中で、「又、冬なのか……。」と思う。

こじゅけいも木の実を求めて再び帰って来た。

落葉して日ざし明るい山あいに

再び帰るこじゅけいの声

この下田山は、大部分の雑木と竹やぶで出来ているが、丁度西にあって、幾分小高くなって私達を冬の冷たい季節風から守ってくれている。そして間もなくすっかり散りつくせば、小暗い山の中は、見違える程、明るくなって、落葉の上は、ぬく／＼と暖かそうだ。そして、花は山茶花から椿へと移って行く。

落葉たく煙ただよふ山陰に

一重の椿ひそやかに咲く

矛盾

一年 森田美佐子

この世の中の人間が全部自分の名前に対する奇妙な執着を捨てて、自分の仕事を世に伝える事だけで満足する様になったら、世の中は今よりもずっと愉快な、そしてもっと内容のあるものになるに違いないのだが、でもこれは本当に我々には手の届かない理想なのかも知れない。あまりにも現実離れしている。しかし私はいつも考へる。もしもこの様に自分の仕事だけに全精力をつぎ込み、賞讃の目的なしに、世の中の為になる事をする人間がいたとしたら……きつと周囲の人はこう言うに違いない。「あれは見せかけだ。」と。これは自分に何もする事の出来ない意気地無しと言葉である。が、しかし現状としてはこの様な考え方の人間が何と多くこの世に存在しているか、これが一般凡人の考え方になっている現在では、何と否定しようとするものではない。こうして書いてある私でさえ自分の名前に対する奇妙な執着を捨てることが出来ないものである。こんな事を考えると、どれが真実で、どれが否定されるものかわからなくなる。でも現状から見ると、正しいとされている筈の利害損得や出世欲を考えないで生活している人間の方が馬鹿に思えてくる。実際、この世は矛盾だらけである。でも矛盾があるからこそこの世はうまく安定し、又成立しているのかも知れない。我々の生きる世界は決して空想や、理想の世界ではない。毎日／＼が何かに

そして大地の為に

大地の上でおのれを忘れて

働いて見よ。

の文中にも見出される。何をするにも利害損得の上に立って働いている現代人、又我々の対人関係の中でさえも時には計算的な考えで接する人の多い現在の姿、自己を反省し、それを実践していく気持ちがあったなら、利害計算の上に立つ対人関係も、又他人はどうであるかと自分さえ良ければという利己的な考えも、とにかく人間生活のあらゆる分野において、今迄以上に向上することは間違いない。しかし私はこの人間生活のすべてを疑い、否定し、理想にだけ走っているのではない。前にも述べた様に矛盾した生活であるが故、今迄に世界をゆるがす様な問題もおきず、何とかうまく成立してきたのである。

理想と現実が一致しないという事は誰もが感じ、又経験しているが、だからといってそれをあきらめてしまつて良いものだろうか。その理想に少しでも近づいていける様我々一人一人が努力し、実践して行く人こそ、真に理想を求めようとする人間の姿ではないだろうか。誰の為にするというのはない。自分自身の為なのだ。その為にはどんな誘惑にも負けない強い信念と、思案力よりも実践力を、又どんな事にも骨おしめせず働ける忠実な心の持ち主を、要するのだ。

人間一人が生きているという事が、こんなにも難しいものであらうとは……

おわっている様な、それでいて一歩でも早く人より先に前進しようとする激しい生存競争、一秒とて気をゆるめる暇のないこの世界、この中において今の自分の現状に満足しきっているものがはたして何人いるだろうか。いや、もし私の前にそんな人が現われたとしても、「その人は現状に満足しているのではない。むしろ未来に夢を持つ事の出来ない哀れな人間である。」と私の片方の心は言う。しかし孔子の論語の一編を読んだ時、「自分の悲運の生活に打ち勝ち、上を見てもうらやましげらず、ただひたすらに今の自分の生活に満足し、温和な日々を送っている人こそ本当の人間の理想の姿なのだ。」と、もう片方の心が言った。私にはわからない。どちらが本当の自分の心であるのか。けれどただ一つ、自分にもハッキリ言える事は、この世界はこの様な簡単な言葉で割り切る事の出来る程、生優しい生活ではないという事である。この機械の様な毎日の生活、こんな中にどうして甘い理想、空想をして生活出来るのか。この世には始めから理想的なものはないのだ。美しいものはかりにあらがれ、太陽に背を向けて生活し、それで幸福をつかもうとする人こそ、最も世間知らずのか弱いそんな人間である。「良いものは汚いものの中に隠されている。それを愛情をもって救い上げてゆくのが我々の対人態度の根本だ」という事を強調したい。」という誰かの言葉がある。私の主張してきた事とは少々異なるが、言いたい事はこの言葉である。又私の好きな詩の一節。

ひからびた自我の棒から

飛び下りよ

糧を大地に求めよ

音楽と私

一年 高橋紀久子

人間生活に於て、芸術というものがどれほど生活を豊富にし、多彩にするものであるか、私は最近この問題に興味をもちはじめ、自分なりに考えてみました。芸術といっても多数あるので、私は一番身近に存在する音楽について考えました。

私の両親は子供達に、小さい時から楽器を習わせるという教育方針をとりました。それは「音楽家にする」ということではなく、「音楽を通じて、生活を楽しく、人格を豊かにする」ということを目的としていました。そして私も五才の時にピアノを与えられ、今日に至っておりますが、それがどれほど今の私に影響をあたえたかわかりませんが、多からず少なからず影響があったと信じます。ピアノ生活は思っているほど楽しいことばかりではありませんでした。そして私は中学に入った事を口実にしてレッスンを三年間休んでしまいました。しかし、その時私は大きな事を発見したのです。それはピアノを弾いていたことによって正確なリズムを得られた事がわかったのです。再びレッスンをやりだしたことは言うまでもありません。（はじめにリズムありき）とある音楽家は言いました。リズムは音楽の生命です。しかし日本人はここに大きな欠陥があるのでないでしょうか？今の40～70代の人、特に男の人で、正確なリズムで唄える人は何人いるでしょうか。歌は楽しくうたえばそ

晩秋の想い

一年 角田 喜一

れでよいという考え方はアサハカだと思えます。本当の楽しさは、正確なリズムを心得てからくるものです。そして、唄というのは、ただ莫然と感動した耳に訴えるばかりではないと思えます。唄は形を与え、頭には思想を、心には勇気をよびますものではないでしょうか。もう一つ、日本人が芸術に対する考え方に大きな欠陥がある事を忘れてはならないと思えます。私は音楽や芸術を単なる趣味とは考えません。もちろん、ピアノも趣味などともあまい気持ちで習っているわけではありません。しかし、世間では、ピアノやバイオリンを習うのを単なるおけいごとと考え、軽くみてはいないでしょうか。それは大きなまちがいだと思うのです。そして、貧しい人々に立派な音楽や、芸術が受け入れられていないのは、このような考えに基づいているのではないのでしょうか。立派な音楽や芸術は、人間の至福と深い関係があるもので、貧しい人々に縁がないということは、人類の不幸であると思えます。

又、今の若人には健全なうたがないという声をききますが、そんな事はないと私は思います。現代のように、ジャズ等が流行していてもその奥には健全な、みんなの楽しめる歌があるということを私は信じます。しかし歌は唄わなければうたになりません。さう声を大にしてうたおうではありませんか。私は朝の十分間、うたをうたうことにしています。それ以来体の調子も良いし、何となくその一日が楽しくなってくるのです。

そして私は、いかに芸術というものが生活になくはならないものであるか、大切にしなければならぬものであるか、痛切に感じた次第です。

ひどく淋しいと思う日が、たまたまある。そんな日、私は独りぼつちで御苑を歩く、元来おっとりしているから、あの松やあの池にささやくのは、その日の楽しみの一つだ。乾いた松も濁った池も、私に逆らはいしない。静寂を愛する友である。

私はつまらぬ思ひをしている。すべて、面白くない日が続く。こんな気持ちから逃げ切れない自分が変に思えてならない。その日も、そうであった。踏みしめられた小石を見つめ、身を震わせて「私は今どうしたらいいだろう。」と、くり返すつづいた。こんなにいやな日が、今日も暮れ行く、人の気も知らないで。

今になっても、なぜこんな気持ちになったか見当がつかない。なぜ形容のできない気持ちを、表わそうとしたか推測できない。

野山に立ち並ぶ木々は、秋になり冬になりそして……。その気持ちと共にその膚の色まで変える。私の気持ちを察し得ない枯葉が、今日も飛び散る。

澄み切った濃紺の空

ふつくら浮かんた雲

彼等ですら、この心を変えてはくれまい。一日がどう消えたか、少しも記憶していない。むやみに一日ずつが、過ぎて行く。もうクリスマスだというのに、相変わらず、幻想にふけっている。冬、その気

配はどこからともなく感じている。いつもながらのあわたたしさも何かしら情に訴えられるものをもつ。魅力があるからだろう。特に淋しい事もないが、何かしら味気ない思いが、脳裏に映る。心の晴れる日が、いつか必ず訪れるだろう。きっと暖風を背負った春と共にやって来るだろう。寒い寒い夕辺の風が冬を知らせた。

私の心に雨が降り続く。誰かの優しい声が、いつでも耳をかすめて消えて行く。ささやくような声を今日も聞いて雨の新宿を通った。暮れ行く新宿の街、通りすがりの客とその風の波には、やはりあわたたしさがいた。霜風の吹く日も間近い。ひしめき合う雑踏に、混じり、濡れた夜道を歩いた。くつが街灯に照り、道に映って輝やいた。

心の底の曇りを捨て切れずに、当惑している。今晚もとても寒い。ひずみの入った心に何が燈るだろう。よどんだ気持ちがいつ澄み行くのだらう。私の思いは、いつも乱れている。自己の気持ちですら言い表わせないから。この文を読む君にも理解できないだらう。何といても君は他人なのだから。

私は憂うつ。私は笑顔が見たくなると、くすぶった壁にかかった鏡をのぞき込む。いつもこうしていなさいと、鏡は嘲笑みを浮べる。でも、淋しそうな時もある。

黒いナップサックを軽く背負い、冬の冷たい山膚をつたって歩く山の男の夢を、連脈を望み、その岩膚を、体を張ってよじ登る男の夢を。力尽きて倒れ行く男、酔いつぶれて雪にうもれて行く男。淋しい夢のために果てた男を、真実の思いのために消えた男を……。

私は凡なる頭しかもち合わせていないが、ふとこんな気分になる。

寒い寒い冬が、私の街を襲った。

生徒の消えた校庭の銀杏は、その色の染まった葉に想いを込め、毎年、この木枯の吹く頃、気散じる。気障りな心は、その色をさました。寂れ行くこの心を誰が知ろうか、錆びついたこの心を誰が、判ろうか。憂え多き年頃に、これぼっちの淋しさに、手間どっている。

私はクラシックな歌曲を好む。悲調な色彩から与えられる感じは何か魅せられる。

葦が濃紫のつぼみを頬ばる頃、澄み渡った空の上を、散り行くあの雲を数えて歩こう。たそがれ過ぎて星を数えて、さよならしよう。ネオンを振り返り見て、こう思った。肩をすぼめて、雨の街を家へと、向かった。

冬を忘れそうな日曜日、もの足りなさを覚え、古ぼけた雨戸を、あけた。近所の子供達の声がする。こんな時は、捨てたはずの童心に、立ち返り、君と話がして見たい。いつもの散歩道で、いつか語ろう。

流れる風は、何か身にせまるものをもつ。ひんやり凍った空気は、なぜか私の心を想わせる。視点の合わない眼を外の彼等に追いやった。いつもながらのはしゃぎようだ。次第に遠のくのがそれで判る。この寒空の、この淋しさの中を、実に楽しそうだ。

あてもない旅へ出たいと思う。この木枯と、冬のきびしさを忘れ

あの陽ざしを、あの夕日の落ちるのを見て、紫にかすんだ連なる峰を、ずっと泳いだペールの雲を夕日に映り、濃朱に咲いた大気をその陰を映し、濃緑のさめた森を、

幾重にも立ち並ぶビルの街を見て、それを想いめぐらせた。

一面淡くうむ空、ほのかな暖かさを帯びた夕日の輝き、その頬笑みにも似た乳色の雲が、ほてりゆると浮かんだ。大自然が、溶け込みそうな空、ただその一面の青さだけが眼に残る。夕日の寒さに身をよじらせた柳は、顔色も変えず、何気なく一日が暮れ行くのみを待ちわびる。頬笑むものも、今はいない。陽光が消えて行く。

一葉残った枯木にも、愛らしさが見える。そのしわよった顔に、哀しさが想われる。昼なお冷たい土も、凍った霜のほどける春を待つ。冬を呼ぶ木枯も、その想いは同じ。霜解けの、あの丘の向うに暖かみを帯びた初春が来る事だろう。

寒空のこの道に、激しい霜風が走り抜けた。落ちた一葉が、皆に混じり枯木をささやいた。そして落葉は眠った。

机に向かい、冷えた足をこすり合わせこう考えた。淋しさ苦しさを知れば、破綻が起り、孤独となる。単に憧れであっても、愛しさ楽しさを知れば、喜びにいつか巡り合うだろう。淋しさのみを、書き連ねたが、孤独を味わうつもりはもちあわせない。頭にひらめし事は、常にこれだけしかない。これだけしか想えない。そして、頭から離れないのである。

私は、それから常に連想する。それら全て、ここへ書き連ねたが、決して目映いとは思わない。

変化ある生活

二年 大墳 靖子

高校に入って色々な経験が私を待っていた。私は高校生活に於て人生一番楽しい変化のある生活を欲していた。変化といっても毎日毎日違った生活を求めるのではない。それは生活の上に於て変化があつて決して複雑でないものである。表面のすっきりした雰囲気をもつことかもしれない。とにかく私は変化のある生活に魅力を感じた。自分の心に写る理想が現実になつて表面に現われる時、冒險欲に燃え上がった自分が満足感を味わう時、そんな時に欲望と夢がうき出しになる。一つのそれが達成された時さらに私は次の起り得る事を望む。それがつまり変化である。しかし常にスムーズに変化が求められるのではない。ステイションで電車を待つ時もある。いやタクシーを呼び止める時もある。それが自然に起る物だけに人は一度に種々な気持を味わう。山に対する気持、愛に対する気持、人間はすべてに変化のある生活を無意識の中に求め、一時の盛上りでそれを通り起してしまう。しかしその盛上りこそ人間の本能によって達成された結果である。しかしその盛上りによって人生が成立していくのである。一時の感情による変化は決して後に残るものではない。なぜならば私の場合、それはすべてに於て、花の咲かないつばみにすぎないからである。花を咲かせるのにまだあらゆる物を必要とするように、結局それは完成に近づいただけであつて

君を理解するのは、常に君であり、君がすべてを判断するのは、君が一面孤独なのである。弱少ながら、この私も判断し理解する事がある。青春を向かへた者として異様に思う人がいないわけではない。今の私にとって、その人——君かも知れないが——は、気を紛らわしているに過ぎないハートフレンドかも知れない。しかし、彼女の噂は、嬉しい。どんなに小さなそれでも、顔が綻びてくる。私の頭が二つあれば、あの人の事のみを考えるのに。しかし、彼女と書いても、何等他人に相異なる。話しかけた事もない。夢に描くのみである。しかし、無性に淋しい時は君に話しかけたくなる。が、何をどう話したら良いか、判らない。ただ君と一緒に、あの裸の庭枯れて残った木々を見ながら歩きつづけたいのだ。窓明かりに映る君を思い浮べて、しばらくまどろんだ。君の素晴らしい夢を思い、痛んだ心を和らげた。夢のある人を素的に思う。それから与えらる感じも良い。

夕暮れ過ぎて、街に灯の映る頃ふとこう口づさんだ。——初めて酔うこの心に、いつか去り行く悲しさが、いつも待つつのさ夜空の星と、どこへ行くのか、君よ——

夕辺、一本のマッチが、火を吐いた、私の手の中で。夢にまで見る人影を追う。そしてはかなく消えた。せつない思いがたくされていた。一本のろうそくが燃え出た。闇を赤く浮き出した。が、炎に揺る影は生きてはいない。風が、小室のほこりをたて、通り過ぎた。

決して完成されたものではないのである。完成されたものは人生に思い出として色どりをそえる。しかしだからと言って完成されるまでの経験が無駄であるというのではない。だが私の短い人生経験においてそれは単なる過程にすぎなかったように思う。基礎からだんだん完成に近づく時に於て、一つが納得出来た時人間はそれ以上の物を求める。一つの場所に定まる事が無い人間の本能はどんな小さな休みをも許さないものである。結局一つの物を獲得する過程に於て少しでも完成されたものが生活の中に大きな割合で足跡を残す。それこそ私が求める変化のある生活であり、人間の求める無意識の本能である。私は一生の思い出が多くなる程失敗も多くなり進歩が多くなる程無知な自己をあらわにしていく事を信じて疑わ無い。むしろそれを手がかりに私は目的地までたどり着かない。自由に、車で、船で、そして仲良しの友達と連れだって、だが私は最後の一步は決して他人まかせにはしない。なぜならば最後の一步は自分の力で自分一人で歩く事が出来るような人間になることを目的とするからである。

駅弁食べ歩記

一年 久津間 正彦

僕は食いである。しかしクラスの人はその事を知らない。僕は学校の昼食はいつも上品に食べているし早メシもめったにしないからである。しかしそんな僕も山や旅に行った時などは、ガラリと態

度が変わってしまう。それは駅弁が食べられるからである。「駅弁」すなわち駅で売っていて旅行者になんとなく便利さを与える弁当。僕の腹はこれを食べるとシビレちゃう。(この前の時はシビレ過ぎてケイレンまで起してしまった。)

僕が駅弁を食べ始めた理由は、何でも見てやろう。いや、何でも食べてやろうという好奇心からである。味などどうでもいいからだ食べてみよう、理由はそれだけである。

中学に入ってから山や旅行が好きになり先生や友達と色々な所へ行くようになった。たまたま本屋で山や旅の本を見ている時、ふと目に止まった一冊の本があった。「全国駅弁案内」という題がついていた。僕はこれもおもしろそうだと思い無理して三百円出して買ってみた。その本は全国の駅弁の種類、値段、特徴がくわしくユーモラスに書いてあった。中学二年の夏休みに、山岳部で磐梯山に行った時東北地方の駅弁を食べながら行こうと計画したが往復とも夜行列車を使用したので残念ながら白河駅でそばを食べたのに過ぎなかった。しかしこのそばは東京のそば屋と違ってとても安い。かけそばで二十円か二十五円だった。よく「名物にうまいものなし」と言うがここではそんな言葉は通じなかった。白河のそばは玄そばだった。そして手打ちでなんととも言えないいい味がした。東北地方の計画が失敗に終わった後、僕はM君と今度は浜松迄の駅弁旅行を行った。M君の実家が御前崎にあるので、その家に遊びに行く途中食べようというのである。まず横浜でシウマイを食べる。金百円也。次は大船。ここでは「あじずし」を食べた。金八十円也、あじずしよりもしそに包んだおすしの方がおいしい様に思えた。電車は小田原

に着いた。僕はいつもと同じように弁当を買った。この

弁当はいつ買ってもなにかは変わっていない。たまには何か変わったものを作ればなあ

と感じた。腹が一応一杯になったのでいい気持で寝ていた

ら電車は静岡に着いていた。ここでお茶と安倍川餅を買って食べた。お茶も本場で飲む

と味がぐつと変わってかく別おいしい。電車の切符は掛川までしか

買っていないが計画には浜松までと考えていた。(M君の家には掛川で下車してバスで行くのだ。)

M君の話によると掛川と浜松の間は検札がないから無賃乗車してもわからないから平気だという事だ。

その言葉を信用して僕は掛川で下車しないで乗りこして浜松に行った。無事浜松に着いて、「うなぎ弁当」を買って食べていたら豊橋の「焼きちくわ」が食べたくなってきた。豊橋は浜松からすぐなので、どうせただだからと思い無賃乗車を豊橋まで延ばした。(国鉄さん、申し訳ない。)

豊橋で「焼きちくわ」を手に入れたと浜松での「うなぎ弁当」の残りといっしょにむしむし食べた。こんな旅をしてからというもの、僕は旅と駅弁にとりつかれてしまった。

中三の時の修学旅行は「ひので号」で行ったので途中弁当が買えなかった。僕はとても残念だった。夏休みには八ヶ岳の帰りに信越

七月十六日(日)、目をさますと列車は浜松の鉄橋の上を走っていた。
の「名古屋へ着く、出札口へ行くと丸山君が来ていた。丸さんは僕の小学校の親友で名古屋へ就職しているので会いに寄ったのである。駅に荷物をあずけ、一旦会社へ行き休んで、十時頃から市内見物へ出かけた。初めに熱田神宮へ行き境内を昔話をしながら歩いた。彼とはもう三年余会ってないので、なつかしかった。再び市内に帰り、名古屋城へ登った。城からのながめは気持ち良かった。それ名古屋市内の道路の広い事とまっすぐな事は特に目についた。それから市内で映画を見て出た時は、もう夕闇がただよっていた。二人で夕食を取り少し市内をぶらついた。

十時過ぎ山さんと別れ、名古屋門司行列車に乗る。
七月十七日(月)五時前、目が覚める。の「姫路着、ただちに朝食を取り、城に行こうと思ったが、まだ開いてなかったのて歩いて城まで行った。姫路城は今は改築中だったので、足場や金網をはっていたため、天主閣は全く見えなかった。後、二年程かかるそうだった。又、城内に縦横にめぐられた城壁はまわりの木立と調和してきれいだった。これで天主閣が見えたらなあ!

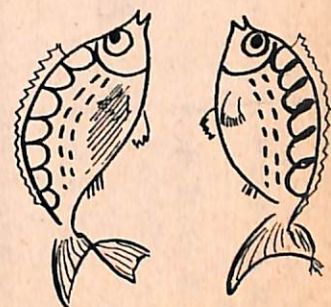
帰りはワンマンバスに乗った。このバスは車掌さんが乗っていないバスである。
13:30 広島行に乗る。15:40 岡山着、すぐに宇野行に乗り変える。17:30 宇野着、そこですぐに宇高連絡船に乗る。八時頃、高松に着く途中に沢山の島があり、その島間を行交う客船、魚を釣って

ダイヤに乗って

二年 後藤 展 志

昨年の七月十五日(土)今日で期末テストも終り僕は帰郷ついでに計画していた旅行をする事にした。

13:10 東京発「東海四号」に乗る。列車は今沼津を過ぎた所だ。昼間だったら富士山も見える事だろう。今から東京→名古屋→姫路→四国→別府→湯平(実家)の予定で旅行しようというのである。今度の旅行はすべて時間表をたよりに気の向くままに行こうと思うのである。いろいろ考えているうちにねむってしまう。



いる小船といかにものどかだった。又静かな波間に真赤な火の玉が沈む時は、一面血を流したようだった。もうおそかったので、夕食を食べ、駅に荷物をあずけ市内で時間つぶしに映画を見た。十一時過ぎ再び駅に帰り駅の待合室で寝た。

七月十八日(火)二時過ぎ、駅員に起こされた。「もう列車が四時までないので駅を閉めますから。」と言ったので、仕方無しに駅を出て波止場へ行ったら、五六人の人が魚を釣っていたので、僕も一諸に並んでボンヤリ浮をながめた。港の光が海面に映り、それが波の立つ度に、ゆらゆらゆれるのは何だか幻のようだった。魚を釣っている人が、じっとうきを見つめているのは石のようだった。

四時過、再び駅へもどり、朝食をすませて、〇〇〇小豆島行「ひとみ丸」に乗った。一時間で船は島へ着いた。島では時間の都合で、観光バスへ乗った。この島は「二十四の瞳」で、有名な島で、又オリブも茂っているめずらしい島でした。途中双子浦や絶壁は壮快だった。又島には醤油会社もあり、そこは本当に町中醤油臭かった。この島からは大阪城築城の石を運び出したそうで、今でも多くの石切り場がそそり立っていた。バスの車掌さんと仲良しになり帰りの船の時、見送に来てくれた。

〇〇〇再び高松へ帰り、駅前からすぐに屋島山頂行のバスへ乗った。四人しか客が乗らなかったで車掌さんといろいろ話をしているうち調子が合って、帰りのケープルの券をもらっちゃった。山頂からの見晴しはパノラマできれいだった。青い海、その中に黒づんで浮かぶ島、きちんと整った塩田、深い入江、そんな島間を行き来

かすかにうなづいた。

七月十九日(水)、目が覚めた時はどこかわからなかったが、すぐに、ああ船だな、と気が付いた。それから朝食を取り甲板に登った。天気は良く風も涼しくて気持ちが良かった。そこで、昨日乗船の時買った水蜜桃を食べた。のどが乾いていたので、何とも言えないうまさだった。

船のまわりには、島がたくさんあり、大小様々の船がその間をゆつくりと、すべるように走っていた。豊後水道にかかったらしく、波が少し高くなった。瀬戸内海とも別れた。間もなく、再び静かになった。陸が見えて来た。いよいよ別府港だ。別府の裏山に布山が見えて来た。テレビ塔も見えて来た。だんだん山が、おいかぶさって来るようだ。

〇〇〇予定より一時間早く船は別府港に着いた。船から降りてバスで大分まで行き、久大線の列車に乗ろうとしていたら、小学校の時の友達五人に会った。そこで一諸に話をしながら家へ帰った。湯平駅で降り、バスで温泉場まで帰った。家に帰ると父母はキョトンとしていた。僕が予告もなしに早く帰って来たので、驚いたのだそう。

すぐに温泉に入り、一年ぶりに我家で寝た。こうして僕の旅も一段落した。

前編了

八月二十一日(月)今日は再び東京へ行く日だ。長かったような夏休みも、後わずか、家へ帰ったら、あれもやろうこれもやろうと思っていた半分も出来なかった。家へ帰るのはいいが、今度出る時

する船、僕はそこで、しばしうっとり眺めていた。それからカゴに乗ってケープル迄行き降りてから、今度は電車で三度高松駅へ引き返し、それからすぐに金比羅宮行のバスへ乗った。一時間余で金比羅宮へ着いた。今日はここへ泊る予定だったが船に間に合うので今日に船へ乗る事にした。金比羅宮の石段が多いので上に登り着いた時には、くたびれていた。ここには五才位の時、父母と一諸に来た事があったが、今では石段を手を引いてももらって登ったのしかおぼえてない。本殿に参拝して、展望台からの琴平市内のがめはとて美しくかった。広い平野の中にポツポツと隆起した山が特に印象的だった。それから再び長い石段を降りて、琴平電鉄の駅まで行ったが、まだ一時間近く時間があつたので、食堂に入って休み、九時近く電車に乗って高松へ帰った。それから駅の荷物を出して、関西汽船の乗場へ行った。船はすでにもう棧橋に着いていた。僕の乗った船は「るり丸」で、この船で小さい時四国に来たのでなつかしかった。おそらく今持っている写真のうち「るり丸」の甲板で母と一諸に写ったものが僕の一番古いものだろう。僕は同じような格好をして甲板上で写真をとった。

〇〇〇船はドラの音とともに静かに岸壁をはなれた。僕は甲板の手摺に寄りかかり、だんだん小さくなる港のネオンをながめながら潮の臭いのする、しっとりとした微風をうけて、いつまでも立っていた。

どの位たったか港のあたりが見えなくなつてから、ブルツと一回、身震いして船室へと降りて行った。毛布をもらいすぐに寝る。

瀬戸内海は全然ゆれないので気持ちがよく、ただわずかに機関の音が

がどうも。早朝五時母から起こされ、最後の温泉へ入る。昨日から家の人が用意は全部して呉れたので、後は出るばかりだ。それでも母は落着かないらしくいろいろ何でもない事を注意したり、荷物を調べてた。恥かしいから見送るなというのに、やっぱり停留所まで、父と一諸に見送りに来た。バスが見えなくなつても、まだつ立っていた。駅で通学の友達と一諸になり、列車で大分駅まで行った。駅で友達と別れ、同駅発の「準急」「第二光号」に乗った。今から東京へ帰る途中ついでだから裏日本を回って行こうと計画したのである。

〇〇〇小倉着、すぐ接続の「準急」「やぐも号」出雲行に乗り変える。ところがこの列車は博多発の列車のため、だいぶ込合つて空席がなく、三時間余立たされたが、これには腰が痛くなつてまいった。山陰の海岸も案外と変化があり面白かった。〇〇〇出雲駅に着く、乗換に少々時間があつたので、ホームの立食ソバを食った。それからブドウを買いい列車に乗った。島根のブドウは西日本では、甲州ブドウと並んで有名だ。〇〇〇出雲大社行に乗る。途中ブドウ畑が沢山あつた。三十分余で大社に着く。今から出雲大社に参る

には、ちょっと遅過ぎるので、泊る事にした。宿を見つけようと思いい店のおじいさんに聞いたら「不老館」と言う所を教え、電話をかけて地図も書いて呉れた。旅館に行きすぐに温泉へはいり、夕食を食って、明日



のダイヤを組んだ。明朝早いので床へ着いたが、暑くてなかなか寝られなかったが、いつの間にかねむってしまった。

八月二十二日(火) 七時起床、すぐに朝食を取り、八時ごろから大社参拝に出かける。天気はいまにも泣き出しそうだった。参道は踊り松の並木できれいだった。大社に参拝して、おみくじを買った。日、旅行東が良と書いてあったので、うれしくなった。それから結婚時を待って書いてあったのには苦笑した。宝物館へ行き、中を見出た時には雨が降っていた。にわか雨だったので、すぐに上った。雨のため大社の本殿はかすんでいて、それが神秘的できれいだった。旅館へ帰り荷物をもらい駅へと向った。駅で売店のおじさんに礼を言うと、「今度およめさんをもらって、是非来いよ。」と言ったので、くすぐったくなっちゃった。二〇〇に大社を出て出雲駅で乗り換え松江へと向った。途中、雨が降ったりやんだりした。安道駅を過ると湖のそばを自動車と並んで走り出した。二〇〇に松江着、雨も上り、うす日がさしていた。すぐに松江城は木造で、熊本城に似ていた。地下一階、地上四階で中は、案外広く、がらんとしていた。急なはしごを登り、最高部へ行ったら、そこは明るく見はらしが良かった。東西を湖と海で囲まれた平野を見下す位置にあり、静かだった。城内には桜の木がたくさんあり、せみが鳴いてのどかだった。春はさぞきれいだろうな。城を降り湖のそばをぶらついて、再び駅へ引返し、二〇〇の列車に乗る。普通列車だったので全然すいていて、一台に二十人位しか乗ってなかった。僕は一座席を一人じめして横になった。間もなく列車は列の東側に見えた海へ出た。

た。列車までには、大分時間があるので、市内を散歩し、鳥取の温泉にはいった。この湯は多くの硫黄がまじっているらしくあった。再び駅へ帰り、待合室で少しねむりをした。

七月二十三日(水) 〇〇〇〇 発の列車に乗り、次の駅がすぐのため本を読んだ。二〇〇 豊岡着、これから宮津線の一番列車で天の橋立へ行こうというのである。まだ時間があるので待合室でうとうとする。

五〇〇 豊岡発の列車にのる。この列車にはかつぎやさんがたくさん乗っていた。この人はほとんど女の人で梨や米などを、おどろく程、沢山かついでいた。そこで例の梨を思い出し五つ買って食べた。おばさん達と話しているうちに列車は二〇〇の橋立に着く。早朝だったので、まだ船は動かなかった。駅前の食堂に入り、朝食を食べ休んだ。食堂に荷物をあづけ、船に乗り松並木で仕切られた湾内を渡り、ケープルで牟松公園へ登った。公園からの湾内は絵に書いたみたいに調和がとれて、きれいだった。そこで僕も有名な服のぞきをやった。どちらが海か空かわからなくなり、自分がその中に吸込まれるような気がした。写真を取りしばらくそこで遊んで、再びケープルで降り、船で駅まで戻った。列車まで食堂で昼食を食べ、休み、二〇〇 福知山行の列車に乗る。二〇〇 西舞鶴へ着き待ち合せに二〇〇 発の列車に乗り変える。西舞鶴を出て少し行くと、まもなく海岸に出る。日本海はおだやかで青くすみ、きれいだった。今日は混んでいるせいか最高にむし暑い。途中きれいな海水浴場がいっぱい窓から見えたので、むしように泳ぎたくなったが、我慢して頑張った。二〇〇 敦賀着、そこで又二〇〇 発の列車に乗り変える。

米子を通ると右手が開けて来て松林のきれいなすそ野が見えて来た。大山口と言う駅に着くと重そうなキスリングをかついだ大学生のパーティがぞろぞろ降りた。間もなく再び海岸線を走り出した。上井という駅を過ぎると、だんだん海岸が広くなり列車は砂地の中を走っていた。海々の松林の中の線路のまわりには、幾重にも竹で作った防砂柵がはりめぐらされていた。又この辺の畑には「とも」しかうわってなかった。

二〇〇 鳥取駅へ荷物をあづけ、砂丘行のバスへ乗る。四十分余で砂丘入口へ着き、そこから砂丘へ行く。途中、店で下駄を借り砂丘の中を歩きまわった。砂をすくってみた暑かった。日中は六十度C近くまでなるそうだ。砂はきめが細かく自然にスリットすべり落ちていき、なんともいいえないう気持だった。それから砂丘でサンドスキーをやり何回もころんだ。七時を通るとさすがに長い夏の太陽も沈み始めた。真赤な大きな太陽が見る間に砂丘の砂の中へとずるずる沈んで行くのは美しかったが、又無気味であった。あの時位太陽が大きく感じた事はなかった。あたりが暗くなって来たので帰り始めた。店で下駄を返し、ふと見ると、うまさうな梨(二十世紀)を売っていたので一つおばさんにむいてもらった。甘味が強く、水気が多く、のどが乾いたせい、かく別うまかった。砂丘のすぐそばにきれいな池があり。そのまわりは全部梨山で、木には白い袋のかぶさった梨が無数にあった。梨を作るのは大変な手間だ、袋だけでも三回もかけなおし、また消毒を何回もやらないと、すぐに病気になるそうだ。八時過ぎ、再び鳥取市内へ帰り夕食を取る。今はもう松高の補習も始まっているので、なるべく早く帰る事にし

いい加減まいって来た。少し行くと山になって来て、列車は何回も、スイッチバックをやりながら、ノロノロ登って行った。その内ますます登りは急になって来て、後おし機関車を付け、苦しうにあえぎながら登って行った。最後の峠のトンネルは長く、煙が車内に充満して、皆苦しうだった。このあたりには防雪林や柵、木の屋根などがあつた。こんなに暑いのに雪が降るなんて不思議だなあ。峠を過ぎると、まもなく下りになり、今庄と言う駅でかまぼこを買って食べた。まもなく平野を走り、福井を過ぎてしばらくたつて二〇〇に金津駅に着く。今日は東尋坊へ行こうかと思っていたが少しおそいのでやめた。芦原温泉へ泊るはずだったが、あまり高いので馬鹿らしくなりやめて再び金津へ引き返した。駅に荷物をあづけ、湯に入り、全部着がえた。それから夕食を食べブラブラしていたら映画館があつたので時間をつぶしに入った。映画館を出た時は十時をまわっていた。明日は早いし、それに暖かかったので旅館へ泊るのは馬鹿らしくなり、駅の待合室でねることにした。なぜ金津を選んだかと言えば前に(高松で)駅で寝ていて深夜おいたてられた苦い経験があつたからである。八月二十四日(木) 六時に起き、一番の東尋坊行のバスに乗る。七時過東尋坊着、東尋坊は海に絶壁がそそり立ちその岩壁に波がくだけるのはきれいだった。そこで遊覧船へ乗って見物した。ギラギラと照り返す太陽は飛び入りみたいになしう動にかられた。又すぐそばに江ノ島に似たきれいな島が海中にポツカリ浮んでいて、一つの橋で陸とつながっていた。帰りに三国町の方をまわって帰った。三国港はこの辺では有名な漁港だそうで、たくさん漁船があつた。再び金津へ帰り二〇〇 発の列車に乗る。

十五分ばかりで大寺へ着きそこからチンチン電車で山中温泉へ向う。十一時過山中温泉へ着き駅前で昼食をすましすぐに共同浴場へ行った。この湯は広くてちょうど良いあつさで、泳ぐ事もできた。湯にはいつているのは年寄が多かった。奥の細道で習った山中温泉を想像して、山の静かな温泉だろなと思っていたのが、あまりにも俗化しているのだからびっくりした。一時過ぎ、山中温泉を出て、栗津へと向った。前の計画では栗津温泉へ泊るはずだったが、補習が始まっているのであるべく早く帰京のため中止した。……栗津駅を出て、……金沢着、駅に荷物をあづけ市内見物に出かける。まずバスで兼緑園へ行き公園内を散歩する。園内は良く整備されていて、松の木や池などが、良く調和していた。公園の真向に金沢城があり、今では金沢大学になっていた。公園を出て駅へ行こうと思いついて、今までの安心したのもつかの間、バスはずんずん山頂の方へ登って行き、とうとう市内が眼下に一望になった。僕は心配になつて来て、「ほんとうに駅へ行くのですか」と言ったら、「ええ山頂のヘルセンタールへ寄って再び折返して来ます。」だってさ。腹が立つやら、がっかりするやらその上五十円とられて頭に來ちゃった。三十分ぐらいい後ようやく山を降り、再び公園入口へ來たので、僕はもういやになりとびおりて、今度は電車で駅までいった。金沢ではきれいな女の人がいやに多く目についた。駅で夕食を食べ列車を待つ。19:10青森行列車に乗る。つかれたためか、少しうとうと

なる筆者が、書くのだから当然痴考であらう。

ところで、プロログはさておいて、最近の出版物のすばらしさには、ただただ心浮かされるばかりである。その内容といい、規模といい、四、五年前ならとうてい得られないようなものばかりである。まず第一に挙げなければならないのが美術書であらう。もともと日本の印刷術は世界でも一流であるが、特に光村の原色刷などは芸術の部類である。五彩七宝を自由に、駆使しアートの画面いっばいにひろがる絵画の種々は、まさにこの世の華である。最近では、矢来町の美術出版社などが、大冊を刊行し始めたが、うれしいかぎりである。実物をめったにおがめない、われわれ庶民にとって、世界一流の印刷術をもつて内容のたしかな大冊が身近に刊行せられるということは、論理尽くせぬことであらう。しかも今では、美術書のみならず、およそ書物と名の付くものは、官は総理府統計局から民は岩波にいたるまで、その発行された本は、簡単に得られるのであるから、その今における読書ブームも、単に一時的な、過渡的なものではなく永続的なものと思う。またわれわれ若人はそうあらねばならないはずだ。

そしてその読書というものを永続的にするには、やはり広義での古典を読まなくてはなるまい。一時的、柳の下のだじょう的な内容のものでは、しよせん永続的読書人つまり現代人にはなりえない。死の商人の作る本は、善良な読書人を害し、未来の知識人を腐敗させる以外のなものでもない。しかしわれわれは、教育によって、理性というすばらしい考察力をもった。この考察力こそが、頁の読書を育て、また読書(教育)によって、より発展してゆくもの

した。……糸魚川着、松本行の一番列車は明朝五時過なので駅で、おて待つ事にした。

駅にはキスリングを持った人も、五人ばかりねて待っていたので僕も心強かった。八月二十五日(金)五時起きる。……松本行に乗り、列車は一路松本へと向う。キスリングを持った人は、途中白馬で降りる。アルプスへ登るんだらう。車窓からは白馬やその他のアルプスの山が見えた。列車は深い谷間を走っていた。海の間あたりは特にきれいだった。……松本着。そこでソバの立食をやる。本場だけあってうまかった。……発の新宿行普通列車に乗る。列車は今、甲府を過ぎ一面のブドウ畑の中を走っている。後数時間で東京だ。こうして長いようで短かった、夏休の旅を終ろうとしているのである。今度の旅行は夏だったので結局旅館には一日しか泊らなかつた。後は全部船、汽車、駅。こういう旅行も楽しいや。皆さんも機会があったら時間表(ダイヤ)をめぐって自分で計画を立て気の向くままに旅行をしてみてもどうですか。

参考までに僕の旅費を書きますと、行、一五六〇円。帰、一五九〇円(船も含む)その他の交通費一六〇〇円でした。以上日記より。

痴論

一年 鈴木 国彦

丸善、東京堂、紀井国屋、……近頃では、犬も食う程に諸階級が読書にわいていようだ。ここで諸階級などとかたくなしういことはを用いたのはほかでもない、筆者の未熟さにはかならない。その未熟

なのだ。この理性(教育)と読書の合体こそわれら若人を真理に向かわせ、人生に悔いることなく生きさせる道であらう。

それらに加うるに、確心する基礎に基づく絶対的主張。いいかえれば、確証的理論があるならば、あくまでも、自分が心から理解するまで主張し、論争し、その結果理解し合うということである。これなどは特に今の若人全体にいえることである。しかしまちがわんで欲しい筆者のいっているのは、ただたんに、井戸端会議をせよといっているのではなく、あらゆるものごと、スジを通うす、と、いうことであつて、ただ感情の走るままにいい争いをせよといっているのではない。もっとも、わかりもせず「顔回」の真似をする、バカ者よりも、例え論理が正確でなくとも強く自己を認めんが為に主張する人間のほうが、その主張点を真に理解する暇には、はるかに人間性が増し、より高度な人間となるわけである、その人間性を増し、より高度な人間(人格)を創造するものが、論争である事が、これによつても、確るであらう。……

その論争というものの中枢をなすものが——実に、真理を求める理論なのである。……

われわれは、その理論を、自分達自身の為に学ばねばならない。より高度な人格形成を目指して。

ときに、

林語堂は、旅には、P・O・D、を携帯し、車中、それに読みふけるのを、趣味とした。

時

一年 三宮 孝志

「時」は奇妙なもので、停止することがなく、休みもしない。疲れないのであろうか。時は過去と未来とを継続させ、実際の事実に基づく行動（現象）のすべての存在を確立させる唯一の秩序の「計器」である。若しこれが混乱した場合、どのようなことを想像出来るであらうか。

「時」は、人間、動物、植物あるいはあらゆる物として存在するものの現象に利害を与える。あるものには成長、拡大、進歩、あるものには減退、縮小、退化を与える。つまり「時」は、機会を与え、それを諸物すべてのものが何故に利用し、成功していくか、又失敗していくか。植物、動物はそれに順応して進化している。人間のみは自己で解決、理解し、行動に移すのである。人間である以上誤解もし、誤った結果もある。人間の長所でもあり短所でもあることを認めないわけにいかない。しかし、誤解をそのままにするのは、それ以上に誤りである。それを真理（真実）正しい事実の行動に変革させねばならぬ。しかし、何を真理の基準におくかはなはだ疑問である。しかし真理とは唯一のものと思われる。換言すれば、二つ以上ないのである。つまり「ある時、泉に來たある男はその水を飲んでしまった」これは飲んだのであって、泳いだわけでもない、飲まないでもない。私なりにこう定義づけられる「他人（他

物）に対して、何物にも害を与えず、又、自己にも損害の無い行動」と。

この様に、利から害へ、害から利へと循環するのである。資本主義の中には、利から利、害から害「貧から貧、富から富」と云うものもある。決して矛盾ではない。（資本主義の罪悪である）「時」は、この様に循環。進歩、減退を周期的な行動として存在させる。そして生から死の間と行動は、制限されてしまうのである。しかしその間に、満足すべき行為は帰結を許さぬ。人間は理想像を造り、それに憧れ尊敬しそれに無限に接近の意（理想像になる目的）を表わす。（現実には敗北し、逃避するためか）しかし、理想を持つことは生きがいを与える。すれば、自然と希望と勇気を与える。故に、満足に近づくことである。（ただし夢想、幻想は自己弁護の目的であるが）満足は限界を有さない。無限である。青空の如く。

「時」は、物事の二面性を同時に判断、解決させない。全てのものには、二つ以上の方法、手段を必ず有し、（同時に存在しないが）人間を惑わせる。神でない以上、どちらが正しいかを立証させない。（証明不可）何故か、つまり、一定の「時」が過ぎてから始めて、その立証が可能になるのである。すなわち現在において未来の起り得る事柄を、少くとも、この世の人間には、確証不可なのである。（うまく云えないが）たまたま確立するとすれば、それは運命、宿命と名が変っているのである。しかし何かには確っているのだらう。でなければ人間は存在しない。（つまり人間は創造されたのだから）運命は、偶然性を否定する。そして必然性を肯定するのである。己の行為を運命とすれば解決である。「明日、病院へ行

く」というのは、予期であって事実起生すべき確定ではない。今日即死するかも知れないのであって、確定の事実（現実の現象）ではない。

「時」は、一刻一刻進むべきものである。（証明は、時計を考えれば良い）速度は万年一定である。そして過ぎし行動は二度再び現在としては存在しない。（タイムマシン以外は）記憶となつて残るか（知覚）事実の文献としてだけである。しかし記憶は問題がある。

過去の失敗（失態）は考えることはない。己の記憶は己を苦しむることの良い方には向けない。しかし失敗を基礎として最下級の段階に築くことは、結構なことである。

他人の記憶は気にとめる必要なし。事実は何ものにも負けぬ無類の強さを貯えているから、故に素直に確認することである。己は自分を尊敬し、自分を大切にすれば良いのだ。（我利我利とは違う、というのは他人の個人も同様であるから）なるべく悔いるあるいは苦しい行為を限られた時間内により多数出来た場合、その人は幸福であり、神に一步近づいたことである（神を理想像とすれば）。

「時」は、単に時間として実存するものではない。物事の現象（行動）を単位として形造られるのである。故に、現象が無ければ「時」は存在しないのである。換言すれば、「時」とは行動が生じた結果の「諸表」と、仮定可能である。

われわれは、この道（譜）においてある期間行動を存在させる。この世及び死滅後の世に対して、何ものかを残さなくてはならない。残さぬなら植物、動物である。いやこれ等は、石炭、石油等を

遺産と為てくれる。人間は確かに何かの目的で生きているのだ。

（私には、まだ良くはわからない。然るに、生きていることに喜び、苦しみを味わうことは少い。）目的がないとすれば人類は、創造されない事と同様であるから。

こう考えると「時」は奇妙ではない。つまり神が我々に与えた、永久不滅で、具つ不変の「譜」なのである。

神は、われわれを試しているのである。人間より、より良い何かを造るために。そして我々は人間以上のものを造らせぬために努力しなくてはならない。

「時」に追われてはいけない、「時」は強引に引張っていくものである。

どうしても「時」のノイローゼが直らない場合には、死ぬこと以外に道はない。——以上思う

——ある個人主義者——

学校の誰かに教えたもの

疑惑、軽蔑、怠慢、不信

劣等、無能……敗退者

学校の誰かに教えるもの

理性の形成、真理の追求

及び道徳と人格形成

……成功者

学校は、白を赤にも、黒にもする。

又、ある者には、気やすめ

ある者には、将来、

ある者には、爪牙

を贈与する。

以上全部は嘘かも知れない。

私の未熟さ、愚かさを人前に披露したのだ。(何故書いたのか)

その時、著者はより愚者と名が変わっていることに気が付いた。

一九六二年 二月十九日

白菊の花

二年 大墳 靖子

何気なく開きし外に乱れ咲く

小菊の白さ目にしみるごと

戸をあけておりたつ庭に白菊の

色あざやかな初姿かな

おり立ちし我が家の庭の白菊は

今年もさかりて色あざやかに

われ一人たたずむ庭に白菊の
色もあやふに雪ふることし



アレツツオへの道

三年 長野 耕子



「気をおつけ! この気違い馬車屋め!」

僕の心はその声を聞くと喜びにふるえる。ここはイタリアだ。そ
う身にしみてわかるからだ。

僕とピアノが逢ったのも、ちょうどこんなふうによく晴れた日
だった。

二年程前、僕はナポレオン・ボナパルトに従ってオーストリアと

戦い、ミラノ城を陥し入れた。その時ボナパルトの兵士達は、二十
七才が最高年令の若者部隊だった。僕もその中の一人だった。
そう、僕の名はジャン・ド・デュバルという。僕は生粋のフラン
ス人だ。

僕はフィレンツェに伯父がいるのを思い出して、ボナパルトに伯
父の所に行く許しをもらいに行った。

ボナパルトはちょうどその頃、総司令官に任ぜられた。そして彼
は実にきげんが良かった。

「あゝ、いいとも。行つて来るがいい。ただし、私がよんだらすぐ
に戻つて来るんだぞ。」

「はい、將軍。」

「行つて来い。そして、伯父上を喜ばしてやるがよい。」

「ありがとうございます。」

僕は勲章をぶら下げた軍服をぬいで、馬に乗ってフィレンツェに
でかけた。

ボナパルトが来たというので、道は大変な混乱だった。

オーストリアとボナパルト派に別れて議論している人もいた。そ
して若いボナパルトを軍神のように思つて賛美している者もいた。
僕はそんな者を見ると、自分がはめられているようでうれしかつ
た。ボナパルトは僕にとつても、僕の同僚にとつても正に命をあず
けた神であった。僕は途中憲兵にもあわずに、無事フィレンツェに
着いた。

「ビエール・ド・デュバルという人の家を知っているかね。」
僕は郊外で村人に尋ねた。

「デューバルさんかね?……一月程前に家が火事になってな、死んだよ。」

村人はのんきな顔をして答えた。

「死んだ?」

まさに僕にとってこの言葉は寝耳に水だった。

「本当か?」

「本当だよ。なんでもフランスに甥がいるとか……ジャンとかいうんだがね、その甥に知らせようと国境まで行った者も、オーストリアの憲兵につかまって、つき返されてきたよ。いやなこったネ。」村人は啞然としている僕を見て不思議そうに言った。

「ところであんた、デューバルさんに何か用かね?」

「僕がその甥のジャンなんだ。」

「えっ?……そうかね……ちっとも知らなかったが……。いやあ、お気の毒だね。」

村人はそう言って十字をきった。

「で、伯父の墓は?」

「こっちの教会ですよ。御案内しましょう。」

「ありがとう。」

僕は馬からおりて、口輪を引きながらその男のあとに従った。しかし、不思議に悲しみがわかなかった。

教会は草っ原にあった。古くさい尖塔のある小さな建物であった。その古くさい、かびくさい教会の前に黒塗りの馬車がとまっていた。その馬車に乗ろうとしている娘がいた。娘は僕の顔を見るととんで来た。

「いや、別に……。」

僕は村人を振り返って思いだした。

「伯父さんの墓参りに来たんだ。」

「まあ、そんな大切な事を忘れちゃって……あなたはどうかしたのね。」

そして、村人に向かうとやさしく言った。

「この方は私が御案内しますわ。御苦勞様。」

そう言って彼女はいくばくかのお金を村人に握らせた。村人はペコペコおじぎをしながら行ってしまった。

僕はビビアンと二人で教会の墓地へ行った。ビビアンは僕と手を組んでよりそって歩いた。そして時々、娘らしいしぐさで、あの塔は聖なんとかの記念よ、とか、あの鐘はならす人がなくなったのか指さして言った。僕はビビアンを見ながら大人になったなあと思つた。

僕が伯父の家に行った時、ビビアンは十五才だったが、とても子供っぽかった。しかし今ではすっかり垢抜けて、パリ娘でもかなわぬ程美しかった。

僕はこのように明かい、美しい人を妻にしたらいいだろうと思つた。そしてそれとなくビビアンに許婚のことを尋ねた。それに対してビビアンはわけがわからないといった調子で「いいえ、どうして?」といっただけだった。僕はそのいかにも不審そうな言葉にひどくうれしくなつて、ビビアンに気づかれぬように一人ほえんだ。その時、一人の婦人がゆっくりと教会の中から出て来た。ビビアンが僕がいっしょにいるのを見て、その婦人は不思議そうな顔を

「あなた、ジャンじゃありません?」

「君は?」

「まあ、ビビアンをお忘れになりましたの?」

娘はそう言って、あきれて僕の顔を見つめた。

「ビビアン? そうだ。君はビビアンだ。覚えてるよ。僕が小さかった時……。」

「ビエール伯父さんの所に来て、一諸に遊んだでしょ。」

「そうだ。ビビアン、懐しいなあ。」

それは確かにビビアンだった。伯父のとなりの家に住んでいる、あまり羽振がいいとはいえない貴族の娘、ビビアンであった。

「ビビアン、じゃあ改めてあいさつをしよう。」

ビビアンは右手をしながら手つきでさし出した。

僕はその手を握って唇に持っていこうとした。

「だめよ。」

ビビアンが言った。

「なぜだね、ビビアン? 君は二十のはずだ。結婚したんだろう?」

「まあ……処女に向つてそのことばは……いいえ、あたしは結婚なんてしてません!」

「これは失礼しました。ビビアン嬢。君があんまり美しいので、もうマドモアゼルではないと思つたよ。」

「お世辞を言つてもだめですよ!」

そう言いながら、ビビアンはいたずらっぽく笑つた。

そして握られた手を引っこめようとしなくて言つた。

「私の家にいらっしゃいな。それとも何か御用が御ありですか?」

した。

「あゝ、お母さん!」

ビビアンはバツと僕からはなれると、その婦人の方へかけて行った。そして僕の方をチラチラと見ながら僕のことをその婦人に話している様子であった。

やがてその婦人はビビアンに手をとられてゆっくりと歩いてきた。そして僕の方を向いて、やわらかいほほえみをうかべながら、ちよつとひざをまげて正式のあいさつをした。僕はびっくりして口の中でモゴモゴと何か言つた。

ビビアンが言った。

「こちらは私の母、ジュリエッタ・デル・クレンチ」

クレンチ夫人が会釈をした。実に細い人であった。今にも折れてしまふような程……。

ビビアンは僕の方を向いて言つた。

「この方はジャン・ド・デューバル。おとなりのビエール・ド・デューバルの甥御さん。」

クレンチ夫人は僕に手をさし出した。僕はそのキリギリスみたいにやせた手に唇をつけた。

クレンチ夫人はニコリした。

僕は夫人を助けて馬車の所までゆき、馬車に乗せた。

「お母さん、ちよつと待つて下さいな。ビエールさんのお墓に行つて来ますからね。」

夫人は弱々しく笑つた。

「あゝ、いいよ。ゆっくりしておいで。私はずっとここで待つてい

ますからね。」

ビビアンはふざけて夫人をちょっとならんだ。そしてまた私の手の中に手をすべり込ませ、歩き出した。

僕は美しい娘と歩くことは好きだった。実にいい気持だ。相手に話しかけられるとステキな音楽でも聞いているようにいい気持になる。そして人が振り返ると、僕はどうしてこうも女にもてるのだろうと思う。少し勝手かも知れないが、心の中で思うくらい別にさしつかえないと思っている。しかしビビアンと歩いていると、もっともつとうれい。百人の美人にとりかこまれてはいるよりもいい気持だ。もっとも百人の美人にとりかこまれたことはまだかつてないが……。

その日はクレンチ邸にとまった。クレンチ夫人の夫、デル・クレンチ子爵はここにはいなかった。アレツナオの屋敷にいた。僕達が居間でくつろいでいると、ビビアンの兄であるジュゼッペ氏がやって来た。

「あ、兄さん」

ビビアンは立ちあがるとジュゼッペ氏の所へかけよった。

「紹介するわ、兄さん」

そう言うとき彼女は兄をつれて僕の側へやって来た。

僕は立ちあがった。

「これは兄のジュゼッペ中尉。こちらの方はフランスの方でジャン・ド・デニバルさん。お父様はフランスの軍人さんよ。」

「デニバルさんか……」

ジュゼッペ中尉は僕の顔を見て愛想よく手を出した。僕はその手を

握りしめた。僕はジュゼッペ中尉の横柄な態度に好感をもった。中尉は僕を見ながらニヤリとした。

「ビエール氏の甥というのは君のことらしいですね。」

「そうです。僕はビエールの甥です。」

「なるほど、そして未来の夫君かね。」

「まあ、兄さん、やめてちょうだい。ジャン、気になさらないでね。兄はいつもこの調子なんですからね……。」

「いや、かまいませんよ、僕は。中尉、お近づきになれて実にうれしいですよ。」

「僕もうれしい。これから仲良くしましょう。」

中尉はそう言ってビビアンに言った。

「君、すわね。女性の前で、男は勝手にすわれないんだよ。」

「あら、ごめんなさい。中尉殿！」

「ジャン小將軍もすわり給え。」

僕はニコニコしながらすわった。中尉はソファの上にとっかすとわると言った。

「マドモアゼル、何か飲み物を下さいませんか。」

「あのたなの上にお酒とブランディがありますから、どうぞ」ビビアンはすましこんで言った。僕は中尉を見ながら実にいい人だと思った。中尉はたなからぶどう酒と三人分のグラスを持って来ると注いだ。

「どうです？ ジャン君。一杯いかがです。フランス人はこれがお好きと聞きましたかね。」

「いただきますよ。」

僕はそう言ってグラスを受け取った。

僕はクレンチ邸にずっととまった。

毎日本中尉と乗馬をしたりビビアンのお相手をしたり、夫人もいっしょになって四人で散歩をしたりした。夫人はひどく健康をそこなっているように僕には思えた。時々せきこんでいるのを僕は見た。

二人の子供は、それについてとても心配していた。しかし夫人は「何でもないので」というばかりだった。そして本当に何でもないようにふるまった。

ある時、僕はビビアンといっしょに散歩にでかけた。

野原を歩いていると、ここがフレンチの近くかと思われるほど静かだった。

突然馬のかける足音がした。中尉が姿をあらわした。中尉はなぜかひどく蒼ざめていた。そして馬の速度をおとしながら僕たちの前にやって来た。

「兄さん、おどろかさなないで！」

ビビアンがおこって言った。

「それどころじゃないんだ。母さんが大変だ！」

中尉はおこったように叫んだ。

「えっ、お母さんが？」

「たおれたんだ。血を吐いて。」

「まあ……」

ビビアンはよろよろとした。僕はビビアンの身を抱きとめた。ビビアンはまっさおになつていた。

「大丈夫ですか？」

僕が言うと、ビビアンはうなづいた。中尉の姿はもうなかった。

僕はビビアンを支えて道を歩き出した。

「ジャン、お母さんはどうなるかしら？」

「だめだよ、変なことを考えては……。」

「……でも……。」

ビビアンのほおに涙が流れた。彼女の涙をふいてやると彼女はニコリした。

「母は、以前からあんな風だったわ。お医者様に注意されて、ここに住んだの。静かな所がいいというのでね……でも……。」

彼女はしゃくりあげた。

「しっかりするんだ。君がそんなに泣いていたら、お母様だって病気が以外に心配事が出来るよ。君は笑うのだ。そうしたら、お母様も安心するよ。」

「笑えるのですか、ジャン。あたしは……あたしはどうなるの。」

父は薄情で、兄だって中尉なんて低い地位にいるのに、一向に運動してくれないし、母を見舞ったことだって一度もないわ。……兄は苦しい生活をしているわ。私は兄に迷惑をかけたくない。」

「君は全くどうかしているよ。そんなことを考えると神様の罰があるよ。」

ビビアンはしくしくと泣き出した。僕は彼女がたまらなくいとおしくなった。

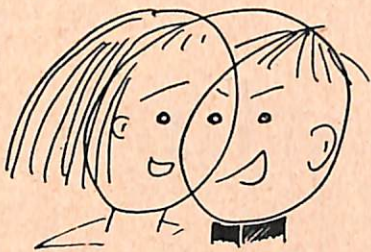
「君を不幸になんかしらないよ。僕がついているじゃないか。」

僕は無意識にそう言った。ビビアンは、ハッと顔を上げると僕の方をまっすぐに見つめた。

「本当?」
「うん。」
「でも……。」
「でも……何?」
「フランス人は浮気よ!」
「僕は……。早く家に行こうよ。」
僕はビビアンの手をとろうとした。
「いやっ。」
ビビアンは叫ぶとさっとかけ出した。そしてたちまち見えなくなっ
て行った。
クレンチ夫人はベッドの中で目をしていていた。
医者がよばれたが彼は言った。
「お坊様をお呼びなさい。」
中尉は顔色を変えた。
「さんげ式の用意をなさった方が……」
「わかりました。」
中尉はそう言っただけで外に出て行った。重苦しい沈黙が部屋
の中をみたした。
「ビビアン……どこ?」
クレンチ夫人が弱々しく言った。
「お母さん!」
ビビアンは泣きながらクレンチ夫人の手をとった。
「ジャンさんは?」
「ここです。」

僕はそう言った。クレンチ夫人はビビアンの手を右手で、僕の手を
左手でにぎりしめて言った。
「私は……命の短いことを知っています。ジェゼッペはかくしている
けれど……。」
「いや! お母さんそんなことを言わないで……」
ビビアンは泣きじゃくった。
「ジャンさん、ビビアンをフランスに連れて行ってやって下さい。
ビビアンはかわいいそうな子です……私の意識のあるうちにどうか返
事をして。」
「夫人、お約束します。僕はビビアンを幸せに出来ます。」
僕は涙をボロボロと落した。
「ありがとうジャンさん……ビビアン、お母さんは、ちゃんとお前
の気持を知っています。お前はジャンさんを大切に下さい。」
「お母さん!」
ビビアンは声をあげて泣き出した。
「二人とも仲良くね。」
夫人はそう言っただけで手を離した。そしてまた、
「私とお父様のようにならないでネ。……でも……あなた方はきつ
と幸せになれますよ。私がそう祈っているのですもの……。私は二
人の晴れの姿を見たかったけれども、……でも、こうして二人の手
を握っていると、私は本当にうれいのですよ。」
しばらくして夫人は昏睡状態におちいった。
僧侶がやってきて、懺悔式を行った。
翌日の夕方近く、夫人は息をひきとった。

ビビアンは毎日泣いていた。僕がいくらなぐさめても、中尉が機嫌
をとつても無駄であった。かえって悲しみを増すようだった。そし
て、一人で部屋にとじこもって、誰も近づけようとはしなかった。
ここへ来てから一ヶ月程して、ボナバルトの使者がすぐ帰るよう
にと告げに来た。
「ジャン、あなた、行っておしまになるのね。」
「ビビアン、許してくれ、でも戻って来るよ。」
「……………」
「僕はフランスに戻ったら、必ず君を迎えに来る。約束する。」
「……………」
「ビビアン、どうして何も言わない
の。」
「……………」



「僕は信用されていないようだネ。
僕は今、軍人なんだ。ボナバルトの
命令は軍命だ。フランスの命令だ。
僕は行かなければならない。君は、
この位の事、わかってもいいはず
だ。」
「わかったわ、ジャン。私、アレツツオの父の家で待っています。」
そしてビビアンは冷たい顔をして僕に手をさしのべた。僕はそれを
握ろうとした。急にビビアンはその手をひっこめた。
「これは、アレツツオで……ネ。」
彼女はそう言って、はじめて笑った。

僕は今、アレツツオに向っている。ビビアンを迎えに行くのだ。
僕のまぶたにビビアンの美しい顔がちらつく。僕は今、二年ぶりに
ビビアンに会いに行く。そして、二人は決して離れまい。僕はビビ
アンを決してはなさない。僕のビビアンは、アレツツオの冷たい父
の家で暮している。しかしフランスに来れば、彼女は社交会の花に
なり、堂々と自分の家で暮せるのだ。逃げ急げ!僕は夢中でムチを
振った。自慢の服を真白にした。けれども、アレツツオに行けば、
この埃をはらってくれる人がいる。なつかしいフィレンツェの家が
見えてきた。しかし素通りをした。僕が用のあるのは、明日の夕方
着くにちがないアレツツオだ。ビビアンのいるアレツツオであつ
た。

どんぐりの歌

二年 阿曾村孝雄

実力試験があった。その結果彼は思ったとうり一番だった。皆を羨望と尊敬の目で見た。彼は得意だった。その得意さの中にしかし一抹の投遺な思いがあった。

「コンナ学校でドンナイ
イ成績ヲトツタツテ世間
デハドウセ認メテクレナ
インダ、コンナ学校ナン
カ……」

東京の郊外にあるこの高校は、駅から学校までのちょっとした商店街を除いて、静かな田園風景にとり囲まれている。

春浅い田園には、その特有ののどかさの他に、何か人を浮き浮きさせるものがあった。

入学して間もない新一年生たちが、それを最も確実に感じとっていた。

一年三組は、今日初めて、この学校の校歌を教わった。何しろ初

に和らぐことを、彼は知っていた。

「覚えてくれないんです。」しかし彼の口をついて出たのは、こんな言葉だった。

「自分の学校の校歌なのです。」

和らかな春の日をあびて、彼は黙ったまま立っていた。教師の穏やかな声が広い音楽室に響く。

「自分の学校の校歌を覚えてくれないというのは、どういう訳ですか。」

「僕にも分かりません」今の彼にとって最も便利なセリフが彼の口から飛び出した。

どうして歌わないのか、何故覚えてくれないのか、彼には分かっていた。ただ、皆の前では言えなかった。それを口に出すことは、皆も感じているかもしれないある感情を、わざわざ露骨にほじくり出すことになるからだ。

「そう、それじゃ覚えてくんならいらっしやい。」教師はそれだけ言うと、また授業を始めた。

彼は椅子に腰掛けたまま相変らず黙っていた。

さっきまで和やかだった部屋の雰囲気は、すっかり気まずいものになっていった。

皆は、彼の方を気にしながら、それでも、精一杯大きな声で、自分たちの学校の校歌を歌った。

春の日の午后、その気だるさを突き破って六時間目終了のベルが鳴ると、校内は、たちまち生き返ったように動き出す。

彼は駅に向う道を一人で歩いていた。周りには三々五々家路につ

めての歌なので、さっきから何度もくり返すのだが、なかなか皆の音が揃わない。

「ではもう一度、前奏に気をつけて、四小節ですよ、あわてて飛び出さないで」

先刻失敗した二人の生徒が前の方で頭を掻いた。

南側に面しているこの音楽室の窓からは、春先の、畑の黒々とした土と、少し離れた所を流れる秋川の白い帯と、それにまだ雪を残している丹沢の山々が遙かに望まれる。

彼はそんな景色を眺めながら、さっきから皆の歌ったり笑ったりしている声を遠くの方に聞いていた。

彼は一人だった。彼は、現在の境遇を心から満足に思っている皆とは違っていた。少くともそうだと、彼は思った。

「横山さん、コソントコードウヤンノ？ オシエテ」

「横山、キョウモ、シャットアウトジャナイカ、アサツテモ、イッ
チョウタノムゼ」

「チョットミテ、アノヒトガ、セイトカイチヨウノ横山サンヨ」

中学時代の、全て華やかだったヒーローの思い出が、今でも彼の脳裏にこびりついていて。そして今も、彼の頭の中を一杯にしていた。

何時の間にか歌声はやみ、今までは違った空気が、周囲を漂っているのに彼は気付いた。

教師や組の皆が自分を見ている。

「横山さん、あなただけ、どうして歌わないのですか？」

こんな時、素直に口先だけでもあやまれば、相手の気遣は簡単

く生徒たちが、教師の言った冗談を笑ったり、しるこ屋に入る相談をしたりしながら歩いている。

ふと彼は、自分が呼ばれているような気がした。念の為に振り返ってみると、やはり、校門を出たあたりに、一人の女生徒が手を振っているのが見えた。彼にはそれが誰だか直ぐにわかった。

彼女は自分の家の近所に住んでいる、小学校からの友達で、今度もまた同級になった八代百合子である。

彼はそこに立ちどまって彼女が追いつくのを待った。

「やあ。」

「横山君、ちょっと、あなたに、うかがいたい、ことが、あるんだけど。」息をはすましながら、彼女はいきなりこう切り出した。

「何だい、そんなにあらたまっちゃって。」

彼女が何をきこうとしているのか、彼には大体の見当がついた。

「今日の音楽の時間のことよ。」

「だから言ったら、僕にもわからないって。」

「うそ、中学の時はあんな変なことしなかったくせに、授業中あんな勝手なことをするなんて、あなたが一番嫌っていたことじゃないって。」

いつもならこの幼な友達に対する親しみの笑みでいっぱいのはずの彼女の目は、今は、級友を心配する真剣な光がみなぎっていた。

今の彼女はとてもごまかせない。彼はそう思った。

「参ったよ、それじゃ卒直に言うけど、実は、僕、あの学校に入っているのがいやなんだ、あの学校に入っていることが恥づかしいん

だよ。」

彼のそういう気持は、彼女も、とっくに知っていた。中学の時、あれほど優秀だった彼が、合格間違いなしといわれた名門S高に落ちて、女子校であるこの高校に来なければならなかったことを、内心不思議にも、また気の毒にも思っていたのだ。

「だから校歌を歌いたくなかったの？」

「うん、皆が楽しそうに校歌を歌っているのを見ると、すごく満足そうに見えるんだ、僕もそのまま仲間に入ってしまうのが残念だったし、くやしかったんだよ。」

「あなたがこの学校をどう思っているのか、私にはよくわかるわ。でも、あなたはあまりに学校の名声というものととられすぎてると思うの、そりゃあ確かにT高よりS高に行ってるって言った方が世間の人はほうって感心するでしょう。でも同じ高校じゃないの、そんなに名声を得たいのだったら、そしてそんなに名声ってものが大切なものなら、勉強なんかしないで野球かラグビーばかりして試合にうんと勝てば、それですむことよ、そんなことにとられるなんてあなたらしくないわ。」

「そりゃあ、僕も名前にあこがれていたというところは少しあるさ、認めるよ。でも、僕がS高にあこがれたのはそんなことばかりじゃないんだ。君も知ってるとうり、S高は秀才校だろ。東大にだって毎年何十人って入るそうじゃないか、高校生として、そんな学校にあこがれを感じるのは当然のことなんじゃないか。」

「ごもっとも、確かに、S高は秀才校よ、一流校よ、東大にだって何十人って団体で入ってしまうわ、それでも仕方ないじゃないの、

しれない。

「伝統々々って、それほど重要なものの、学校がよくなくちゃ、いくらかんばってもだめだよ。」

彼は自分の考えを頭の中で練ることなく、型にあてはめたようにしゃべった。

ちよど今の彼は、バネのようなものだった。こちらがひっぱればひっぱるほど、強くそれに反発する。今は完全に説得出来得る時期ではない。彼女はそう思った。

彼女は話題を変えた。しかし何となく身の入らない会話を二言三言交わしただけで、あとは黙ったまま並んで駅に向った。

そんなことがあってから、以前にも増して、学校における彼の行動は、中学時代のそれとは全く正反対なものになっていった。内向的な、消極的な、時にはふてくされたものさえ伴って……。

H・Rといえば、進んで発言し、自分の意見を述べた彼だったが、今では、そのH・Rにでさえも、あざけったような、不真面目な態度で臨むようになっていた。

彼のこんな態度には、薄々組の皆も感付き始め、今や、彼を見る組の目は、以前、彼が実力試験で一番になった時のような、好意に満ちたものではなかった。彼は完全に異端者として、組に孤立してしまった。彼の心中にある程度理解しおし包める者は、八代百合子ただ一人であった。あれから彼女は何度も彼に忠告し、時には、彼の家さえも訪れた。しかし、彼はいつでも、かたい、鋼鉄のバネだった。ひっぱられれば、ひっぱられるほど、彼は自分の境遇を、自分自身を、みじめに感じるだけであった。

あそこにはあそこ古い伝統というものがあつたから……。

代々、先輩によって裁かれた伝統の下でぬくぬくと育てられて、気がついた時は東大に入っていた。あり得ることだわ。勿論、S高生はS高生でものすごい勉強をしているのでしょけれど、だから、S高に入った方が東大に入れる可能性は大きいかもしれないわ、でも私思うの、T高だって、S高みたいに古いってばな伝統というものがあれば、S高に負けず劣らずのりっぱな成績を修められるって、でも、T高には今のところ、そんなにりっぱな伝統なんてものないわ、だから生徒の気質だって、まだ固まっていないうわつたものに過ぎないわけよ、とにかく、私達の学問とか、毎日の行動とかの積み重ねによって、りっぱなT高の伝統を築いていくのが私達に課せられた第一の仕事だと思わ、同じ東大に入るにしたら、お兄ちゃんやお姉ちゃんの作ってくれた暖かい保温箱の中でぬくぬくと育てておいてくれるよりも、寒い北風の中で、自分でみを作らなければならない方が、ずっと尊いんじゃないかしら、私たちの学校はまだ新しいんだから、私達の手でりっぱな伝統をこしらえて、レベルの高い学校に持ち上げていくチャンスはこれからいくらでもあるはずよ。特にあなたなんか、この間の実力試験でも一番だったんでしょそれに中学時代は生徒会の中心者でもあったわけだし、しっかりしてもらわなくては、T高生で何ら恥づべきことなしよ！」

彼には彼女の言っていることがいまいち、もっともなことのように思えた、しかし、それをそのまま素直に受け入れる気にはなれなかった。何といても彼はS高に落ちたのである。もしかしたら、その敗北感が、彼の気持をよけいかたくななものにしていたのかも

ただ、彼は、そうして自分のことを心配してくれる、彼女の友情というものを、心からうれしくは思っていたのである。

五月も半ばを過ぎると、新入生という言葉より、一年生という言葉の方がすっきりしてくる。完全なT高生になりきった彼等一年生は、既に、三回の実力試験を経た。異端者、横山義彦が、常にそのトップを奪っていた。そしてその度毎に、彼は異端者として、また、支配者としてのさげすみの目で彼以外の人間共を見た。

中学時代一度だって見せたことのなかった。彼の、この様な面を見せつけられて、彼女は、すっかり驚いていた。彼が良い成績をとったことにでなく、それをわざと誇るような態度に、である。

今日もまた、四回目の試験があった。彼は勝ちほこったように、鉛筆を走らせていた。

今日の時間割は三時間目までが、この試験、四、五、六時間が普通授業というものだったが、六時間目の国乙の先生が休みだったの、一年三組は他の組より、一時間早く帰れることになった。皆は歓声を挙げてこの朗報を聞いた。他に隣の二組が五時間目に国乙がある、六時間目の授業をくり下げて行い、やはり早く帰れることになった。

いつも、登下校時は、T高生でこつた返すこの駅も、その時間にならなければ静かなものだった。一年二組と三組のうち、この鉄道を利用するのは約半数で、あとはバスか徒歩通学であった。クラブ活動やそうじ当番で学校に残ったものをひくと、今ホームで電車を待っている生徒は、ほんの、二十人程度である。

レモンイエローにライトブルーのスマートな郊外電車が三両編成

でホームにすべり込んできた。

午後の二時過ぎ。まだ沿線の学校がひけるには一時間程の間がある。

彼はカバンをかかえて一番前の電車に乗った。

車内には、どこかもとつ先の方にある私立の男子高校生らしいのが六、七人前の方のシートを占領している他は、乗客は誰もいなかった。

彼はカバンをかかえたままで、ドアの所に立った。

坐れば、いくらでも坐席はあるのだが、彼は、そうして外の景色を見るのが好きだった。

その車には、他に彼と同級の男生徒が四人と、女生徒が二、三人乗りこんだ。

それぞれ今日の試験のことについて、話の花を咲かせている。静かだった車内は一瞬にしてにぎやかになった。

前から乗っていた六、七人の高校生は、どうせ、いずれも授業をエスケープしてきたのであろう。あまりガラのよくない図体の大きい男ばかりであった。

彼等は、それまでヒソヒソ話していた、何やら品の悪い話をやめて、今度は、他の学校の批評を通路を、融てて、シートとシートの間で、声高にやり始めた。

これは、明らかに、今乗り込んだ、一見して一年生とわかる彼等、彼女等、に対するいやがらせである。

「よう、お前よう、T高校って、知ってっか。」

「ああ、確か、この辺にそんな学校があったっけな。」

「あすこの女の子きたら、ブス（醜女）ばかり、嫁のもらい手があんのカナ。」

義彦は百合子のことを、チラッと考えた。彼女もそのブスだというのか、彼は初めて、怒りがこみ上げてくるような気がした。

「それによろ、あすこを出た奴ってロクな者にならねえってな、イカれててよう……。」

その時、その発言をしたデッサン自身、そのロクな者でなくイカれていることを思い出し、あわてて言った。

「俺たちみたいにパンチョウ（中学生や高校生の不良グループの親分）上りだったら、いいカオ（親分）にもなれただけどう、あすこのチンピラ共といたら、からっきし、意気地がなくていけねえやまあ、あの学校はせいぜい、チンピラでも養成してれば、いいってもんだナ。」デッサンが悟りきったようなことを言い終ると、野球できたえた義彦の右腕が、そのデッサンのみぞ落ちにあざやかにきまるのと同時であった。

デッサンは低いうめき声をもらしてたあいもなく、そこにうずくまっていた。

「おっ、この野郎、やるじゃねえか」誰かがこうするのを待ちかまえていたかのように、男たちは義彦をとり囲んだ。義彦は夢中で、すぐ横にいたノッポの向うずねを跳つ飛ばした。しかし、それはかわされて、義彦のあごにニキビ面のアップーカットが入っていた。

四、五回いや六、七回もつと多かつたかも知れない。義彦は、なぐられたり、跳られたりしてそのまま目の前が真っ白に、そして段々赤く、黒くなっていった。

それまで楽しいおしゃべりをしてきた。七、八のT高の一年生たちは一瞬、こわばった表情をした。何やら図体のデカイ連中が自分達にありがたないことをしてくる。彼等は直感的に、あるいは弱い者の本能によって、それを感じた。

「何だか知らねえケドよう、あまり良くねえってな。」

「ああ、俺の中学の時のダチ（友達）がよう、二人行ってっけど、二人とも出来のいい方じゃねえもんナ。」

「あつたりめえじゃねえか、お前のダチじゃな。」

「てやんでい。」

話をしているのは、一番ノッポとニキビ面とデッサンの三人であるあとの連中は皆、その会話に、あまり利功そでない笑い声をたてていた。

今や、車内にいるT高生はネコの前のネズミのような存在だった。皆、つとめて、知らんふりをしてるように装っていたが、心中の波風は、そのまま表情に表われていた。真青になっている者、顔をみにくくひきつらせて、無理に英語の教科書をながめている者。恐らく単語など一つ一つ目に入っていないだろう。

自分の学校に微塵の誇りも感じていないはずの横山義彦も、何かしら、平静とは違った気持で、彼等の会話を聞いていた。

「あすこのセンコウ（教師）ときたら、また勉強しろ勉強しろってうるせんだって、生徒がよう、三流ドコロじゃ、仕用がねえのになあ、あーあーイヤんなっちゃった、あーあーあーお驚いた。」

「ケッケケケケッ。」ニキビ面が下品な笑い声を出した。

義彦は腹の真中辺がぐつと押されるような気がした。

気が付いた時、彼は、彼がいつも下る駅の駅長室に寝かされていた。囲りには心配そうにしている級友の姿が沢山見えた。皆一緒の車にいた友達である。中には、この駅に来る途中の駅で下るはずの友達顔も見えた。一人がすまなそうな顔をして言った。

「僕たち、助けようとしなくて、ごめん。」

「いいんだよ、あんなに沢山大きいのがいたんだもの、加勢してくれたって負けちゃうよ。」

親切な駅長のとり計らいで駅から自宅まで彼はタクシーに乗せられて帰った。

家では、大騒ぎであった。直ぐに近くの外科医を呼んで、精密な診察を受けた。その結果、大きな外傷は無いが、ちよつと打撲がひどいので、一週間程、家で安静にするように、とのことであった。ただオロオロするばかりだった彼の母親も、その事をきいて、少し安心したようである。

会社から知らせをきいて急いで帰ってきた父親も、我子が案外、元気そうなのでホッとした表情であった。そして、義彦から事の第一部始終を話されると

「フム、フム。」ときいていた。この父親は、何故か満足気に我子をつめた。

担任の西田先生も、翌日、学校がひけると直ぐに、見舞に来られた。まだ若いこの男の先生は、義彦の話をきくと、

「けしからん、けしからん。」

の連発で、もしあの連中が目の前に現われたら、すぐにでも、飛びかかって行かんばかりの見模であった。しかし彼にはやさしく、

遠い夢

三年 松野 祈 三

「まあ、ゆっくり養生しなさい。学校の事は心配せずに、この近所に八代百合子がいたな、彼女に色々な連絡をして貰うから、それじゃ。」といって帰っていった。

実は、先生が帰る少し前に、八代百合子は枕元に花束を置いて帰っていったばかりなのである。

それから三日程たった土曜日の午后、一緒にあの電車に乗っていた友達をはじめ、話をきいた多勢の級友たちが、見舞に横山家を訪れた。話をきいてすっかり感激してしまつた二年生の女生徒三人をも交えて、こんなに多勢の見舞客に一度に來られた横山家は、てんやわんやであつた。義彦もテレてふとんの中に顔をかくしてしまつた。

部屋に案内された彼等はふとんの中にもぐっている彼を見て、てんで一言ずつ感想を述べた。

「やあ、横山、お前、見直しちゃつた。」

「寝てんのかい息してる？」

「くろろろさん」

「顔出してよ、痛かつた？」

「握手しましょ」

「丁校万才、横山万才。」

彼はテレくさそうにふとんの外に顔を出して皆に言つた。

「校歌の歌い出しは、どうゆんだっけ？」

— 完 —

た。すけそうダラとすいとんの味が舌にほぐれ、母の手づくりの苦勞したであらう一日の糧をむさぼり、父と母の暖い眼差のもとで何の苦勞もなくすくすくと育つた。

幼き頃

幼稚園に通う頃になると、私はもう一人前な顔をして、田圃道を竹棒を振りまわしながら暴れまわっていたらしい。それでも暴れん坊の私に似合わず、炊事だけは何か好きだつた。幼稚園に通うのに、近所の女の子と二人して一諸に行つた思い出がある。名前は忘れたが、可愛い子だつた。共に遊び共に歩き、良く喧嘩もした。その子と私は同い年だつたように思う。あるいは私より一つ年上だつたかもしれない。

小学校に入る年、父の転勤の為、私は東京に転居しなければならなかつた。それ以来その子には会っていない。今はもう大人になっているであらう。いや早婚の風習がある地のことでもあるから、すでに家庭の主婦になっているかもしれない彼女なのに、私は彼女を大人にさせたくない。私の心の中に生き続けるその可愛らしい子は、真赤なりボンをつけ、赤い頬をした、目のくり／＼と大きい、本当にあどけない思ひ出の顔なのだ。

淡さ

「ばか」俺の手が相手の頬を打つた。その後に組み合いの喧嘩が始まつた。結局私は勝つた。相手はうずくまつて泣いていた。私は少し憐れむような視線を投げながらランドセルを重そうに肩にかつ

誕生

十九年前

戦乱に明け暮れ

野盗の走りまわる

あわただしい異国の空の下で

一つの生命が

白珠となって生まれ落ちたといふ

そんな事実が

今の私につながる

思ひ出の記憶なのかもしれない。

揺籃の地

北上川のせせらぎの音が聞えてくるような、河辺に近い貧しい岩木の里で、終戦と同時に大陸から引揚げて以來、六つの年まで私は育てられた。雪の多い素朴な北国だつた。

戦後の貧しい世の中であつて、貧しき中にも幸福があつた。馬そのりの「ジャンシャン」という鈴音を聞きながら目と鼻と舌、やすらかに眠つた。たとへ身はやせていても床を這い床を立ちそこを歩い

いだ。でも頬に自と浮び上ってくる勝利者の微笑が私に得意にさせていた。

「さあ、ヒデちゃん、帰ろう。」

泣きそうな顔をして側にたたずんでいた秀子の手を取って私は足早に歩き出した。

こんな光景、まるで昨日のことのようだ。

秀子は、太平洋戦争が激しさを増していた頃、貿易商社に勤めていた独逸人と彼女の母との間に生まれた混血児だつた。

彼女の皮膚の色は透き通るように真白で、髪は赤毛だつた。彼女は父親の血を引いたのか外国人のようなホリの深い目鼻立をしていた。そんな秀子が当時の私には美しい西洋人形のように見えたのだつた。

秀子は私の家の隣に住んでいた。だから手をつないで学校に行ったりしたし、一諸になつて良く遊びもした。幼ない私の心に秀子に対する淡い感情が刈生えていたのも事実だつた。

秀子には女友達が居なかつた。というより出来なかつたのだ。誰もが彼女をのけものにした。彼女が混血児であるという、ただそれだけの理由で。皆が一諸になつて遊んでいても、秀子はいつも仲間はずれにされていた。内気な秀子はそんな仕打をされても決して泣いたり怒ったりしなかつた。皆が遊んでいるのを退屈そうに見ているだけだつた。じつと孤独に耐えている秀子の姿は痛々しい程だつた。私はそんな秀子に大いに同情した。

「ヒデ子も入れてやれよ。」そう云つたこともあつた。その為には皆からひやかされ、はやし立てられることもあつた。

「……のお嫁さんはヒデ子なのかい？」

「……とヒデ子、ヤーイ。」

でもそう云われても私は決していやな気がしなかった。

「ヒデちゃんは僕のお嫁さんになるんだ。」

幼き心の中でそう思っていたりした。

秀子とは小学校一年から学校もクラスもずっと一諸だった。二人一諸に机を並べたことも幾度かあった。

秀子は、学校内や下校の途中に他のクラスの者やいわゆる「いじめっ子」という奴等にかかわれたり、ひやかされたりすることがあった。「あいのこ、ヤーイ」そんな言葉が秀子にあげせかけられた。秀子はそれを極度に恐れていた。しかし私が秀子と側に居る時だけは別だった。そんな事を言う奴があると私は前後の見境もなくすぐに飛びかかっていった。その頃ガキ大将で通っていた私はいつも勝つのだった。秀子と私はお互いに「淡さ」を感じながら仲良く育っていった。時折、仲違いすることはあつたけれども。

秀子は小学校四年の夏、私立の名門女学校附属に転校していった。それから間もなく、家も引越してしまった。

今頃はきつと綺麗になっているであろう彼女が、最近になって本当になつかしく思われるのだ。幼き日の「淡さ」は本当に美しく清いものだ。と今、痛感するのである彼女には会ってみたい気もする。本当に古き良き思い出なのである。

追想

今年もまた夏がやって来た。

にはしゃぎ出してきた。下から上へ登ってはまた下ること四回、もう一回で止めよう。そう言っている私は舟首を上に向けた。私はその時舟の先手に立って舟を上へ上へと持っていた。この辺から下そうと思つてさおを右から左へ変えて舟の向きを下方にしようと思つた。するとどうしたのだらう。急に舟が傾いた。私は「はっ」として次の瞬間急いで傾きを直そうとした。しかしあせればあせる程、私の身の安定性が失なわれ、妙子の驚き騒ぐ声がかすかに耳に入るだけだった。ついに船は腹を上に向けて転覆してしまつた。それと同時に私は川の中に投げ出された。冷い水の中で必死になつてもがいているうち、やっと水面に浮び上がることが出来た。本当に苦しかつた私は泳ぎが余り得意ではなかつた為、流れに逆らわずにうかび上っているのが精一杯だった。振り落された時、舟首に頭を打つたのか頭が割れるように痛かつた。気を失なつていくようにも思えた。ぼんやりと流れに浮びながらあたりを見まわした。すると向うの方に妙子のもがいている姿が目についた。私はすぐにでも助けてやりたかつた。だが妙子はすでに最上川の流れの本流に入つてしまつていた。私はその時まだ本流で泳いだ経験が無かつた。本流の流れは川岸寄りの流れより倍近くも早かつた。水温もかなり違つてはいるはずだ。やっと水面に浮んでいることの出来る私は、どうしても自分一人では彼女を助ける自信がなかつた。否、もし私が本流に入つたら泳ぎ続けることが出来ずに死んでしまうかもしれないと思つた。死への恐怖、生への執着が私の頭の中に渦まき交錯していた。私は一まず自分自身をなんとか川岸にはい上らせて助けようと思つた。その後で妙子のことを考えよう。私は必死になつて岸に向つて泳ぎ

夏の思い出……その悲しい思い出は私を苦しめる。

中学二年の夏、私は母の郷里に一ヶ月程帰省していた。最上川の川音が聞こえてくる美しい田園の中で私は毎日を送っていた。

堤の草は青々と茂つて美しく、夏の太陽に照らされている。私は隣家の妙子と二人で山羊にやる草を刈りに川原に出た。妙子は私と同じ年の農家の娘で、毎年この村に帰省する私とはもうすっかり顔なじみになつていた。妙子とは気軽に話し合うことが出来るようになっていたし、私は妙子が好きでもあつた。草刈りがいつもより早目に終つたので、妙子と二人で川原を散歩することにした。とてもむし暑い日だった。真昼のあまりにも強い太陽のためか釣人の姿はいつも見かけられなかつた。私は少しくたびれていた。

「ここで休んでいこうや。」

「うん」

妙子も賛成してくれた。私は妙子と二人で堤の青草の上に腰を下した。私は東京で起つた色々な事件やとてもない馬鹿話を始めた。川は音をたてて流れてゆく。そんなことをしながら三十分もしたろうか。ふと、私は目の前にある小舟に乗つて見たくなつた。見つかればおこられることは解っているが、誰も来そうにない。「あれに乗つてみないか、上から下つてくるとでんでんが持がいいぞ。」

「あぶないからよしなさいよ。」

妙子が笑いながら言つた。私はその頃相当な臆白小僧だったので、妙子の忠告なんか少しも気にかけずむしろいやがる妙子を無理矢理小舟に乗せてしまつた。その妙子も二回三回と繰り返しているうち

始めた。やつとのことで岸にたどりつた私は、もう少しも動けない程つかれていて、心も動揺してゐた。だが余裕は無かつた。この一刻を争う時にこんなにしてよいだらうか。あたりを素早く見回した。人影は無かつた。近くに人家は無い家に帰つて人を呼ぶには時間がかかり過ぎる。川を見ると妙子の姿がまさに水中に没しようとしていた。それもまもなく見えなくなつた。ただ舟のさかさまになつて流れてゆくのが見えた。次の行動をいかにすべきかはとつさには私の頭に浮んでこなかつた。

「そうだ、橋の下で妙子を助けよう」

私は河原を夢中になつて走つた。いつしか私の両眼から涙が吹き出していた。河原の石が裸足に痛かつた。小指のつめがはがれ指の間に血がにじんでいた。それにも気付かず私はひたすら橋に向つて走り続けた。

「妙子、生きていてくれよう。」

「死んじゃだめだぞう。」

「生きていて……」

橋の下にやつとついた私は、河水にひざまでつかりながら長い竹棒を持つて妙子の流れしてくるのを待たつた。

五分、十分、恐怖とあせりの為に自分の顔がこわばっているのが解つた。唇をきつとくんで私は終始無言だった。涙はいつのまにか止まつていた。

彼女の黒い髪と水色のブラウスがブカブカと流れてきた。「あつ妙子だ、妙子が来た。」私は心の中でそう叫んでいた。ひよろひよろとよろめきながら彼女に近づいていった。

やつのことで彼女を岸に上げた。

彼女はすでに水のように冷たくなっていた。私はすぐ彼女の目を開けてみた。美しい目だった。しかし……彼女はずでに死んでいたのだ。村中は火のついたような騒ぎとなった。当然私は警察に呼び出しを受けた。しかし私のしたことは決して故意ではなく、またその当時十三の未青年者だった為、翌日東京の両親のもとに帰された。しかしそれからというもの、一人苦しみ、悩み、煩悶しなければならぬ生活が始まった。私は本当に苦しんだ。彼女と一緒に死んでしまえば良かったと後悔した。私はあの時死ぬ覚悟で彼女を助けねばならなかったのだと思った。

私の両親は私の気持ちを良く理解してくれた。それだけが私にとって唯一の慰めとなった。

あれから六年、今こうして彼女の事を思うと、妙子の断末魔の叫びとあの時私が取った行為を思い出し、残念な思い出として新たな悲しみが胸に押し寄せてくるのである。

一人の男

中学二年の秋から男の生活に次第に荒れていった。それは男自身にも良く判っていた。泣いたことなど無かったその男も、勉強部屋から見える夕焼の丹沢山塊を見ては涙を流したことがしばしばだった。涙が目一杯たまつて夕焼空の赤ね雲がうるんで見えた。そんなことが幾度もあった。男の心はいつのまにか自暴自棄のすてきな気持が支配するようになっていた。男の行動と言動が荒れ、どうしようもない不安な気持が男の頭の中で渦まきうごめき、それが男

のすべての行動を粗暴なものにしていた。今までめったにしたことがなかった喧嘩を、その男はするようになった。喧嘩をしている時、その男はすべての苦しみを忘れることが出来た。

男の友人はだんだん彼の側から離れていった。そのことがその男にはかなりの衝撃だった。だが男のまわりに新しい友人達が寄ってきた。男はそれに満足した。男はそれらの仲間と一語になつてますます暴れまわるようになった。教師を困らせることを平気でやるような生徒になった。

男は変つた。それが男には良く解っていた。だが男は自分が變つていくことを残念に思っていた。いつか、いや近いうちにもとの自分に返らねばならないと思つた。だがなか／＼昔の自分を取り戻すことは出来なかった。

一年過ぎた。男は前よりも一層悩むようになった。高校入試という問題を身近かに感じないわけにはいかなかった。勉強しなければならぬと思つた。しかし勉強は手につかなかった。男は死にたいと思つた。

男は私だった。

私が変わつた？ 何故だろう。何か理由があつたのだろうか。

はつきりは解らない。でもその頃私がやりきれない不安に常に悩まされていたのは本当のことだ。そして時々胸に去来する悲しみを忘れようと一人煩悶していたのも事実だ。今思い出すと、私が何故變つていったかが良く解るような気がするのだ。

闘病

高校に入つてまもなく私は大病を煩つた。死が身近になつた時期が幾度かあつた。病状はなか／＼快方に向かわなかった。それ程病気は重かつた。

半年がまたたくまに過ぎた。私は自分が一年学校が遅れることを知つた。でもそれに対しては何の感情も起らなかった。私は病気のことでだけ考えた。早く治りたいと思つた。

一年たつて、私はどうやら通学出来るまでになった。長く辛くそして苦しかった闘病生活は終つた。その一年間は人間私の性格を大きく変えていた。荒々しかった性格は別人のように温順になつていった。顔つきも變つていった。それには私自身少なからず驚いた。

話し方も變つた。本を良く読むようになった。読書が好きになつた。考えるということが好きになった。文芸に親しむようになった。絵も書くようになった。殊に油絵に興味を持った。

私はたしかに變つた。でも人間私は果して進歩したのだろうか。

たわごとの年頃

まだ

あまりに若い俺

それ故に俺一人だけの

胸に秘めた

一寸寂しい恋をした。

すばらしい夢が

君の草笛に乗つて

やってくるよ

夏の夜の

疲れた風に吹かれて

飛んでくるよ

ぶゆう ひゆう

びゆう びよん

君が

疲れた体を

ヴェランダの藤椅子に

ぐったりと横たえると

俺の心は

妙に騒ぐんだ

風が

君のそのやさしい頬をなで

二本の乱れ髪は

君のまぶたにたれかかるよ

ぶゆう ひゆう

びゆう びよんとね。

きつと

風は君に

